

『中宮亮重家朝臣家歌合』注釈(一)

武田元治

『中宮亮重家朝臣家歌合』は、永万二年(一一六六年)に藤原重家が催した歌合で、判者を藤原俊成が顕広の名で務めている。歌題は花郭公、月、雪、恋の五題で、各題十四番、参加した歌人は次の二十八人である。

(左) 実国、隆季、宗家、雅頼、重家、経盛、公重、通能、季経、資隆、頼保、西遊、成仲、心覚

(右) 小侍従、三河、弁、右京大夫、頼政、師光、頼輔、有房、隆信、顕昭、寂念、生西、政平、俊恵

これらの歌人たちは、主催者重家の属する六条藤家の人や、重家と親しい関係にあった六条源家の人の外、歌林苑関係の人が多い。

判者俊成は当時五十三歳であった。この二年前の歌林苑歌合の俊成の判詞は断片的に残るのみなので、本歌合が俊成の初期の判詞を全面的に伝える最初のものである。

伝本はすべて同系統と見られている。ここでは内閣文庫本を底本とする『新編国歌大観』の本文により、その解釈を試みる。

花

一番 左持

中納言実国

一をちかたのかぜにみだるいとざくらわがてにかけてみるよしもがな

右 小侍従
二いのちあらばはるにはまたもあふべきをはなにおくれてひと日やはへむ

左歌、をちかたのいと桜、まことにおもひよりがたく、めづらしく見ゆ。右歌、はるにはまたもなどいへるわたり、をかしくもきこゆるを、すゑの句やあまりならむ。さすがにさきざきのとしも花にはおかれてのみこそは。かの貫之が、我が身にしあればをしき春かなといひ、長能が、いけばのちのなどよめるは、めでたく侍るものを、この一日やはへむは、いかにぞや、たらずもきこゆるにや。ただし、歌のさまとりどりなり。仍為_レ持。

【通釈】

花

一番 左持

中納言実国

一遠方の、風に乱れる糸桜は、わたしの手に掛けて見たいものだと思ふ。

右

小侍従

二命があれば、春には再び会えるだろうが、花に取り残されて、一日も過ごせようか。

左の歌は、遠方の糸桜を詠んでいるが、これはまことに思い付きにくいことで、目新しく見える。右の歌は、「春にはまたも」な

どと詠んでいるあたりは面白いとも思われるが、下の句は余りに度を越えた詠み方であろうかと思う。「花におくれてひと日やはむ」とは言っても、これまでの年も花には必ず取り残されてきたはずである。あの貴之が、「又もこむ時ぞと思へどたのまれぬ我が身にしあれば惜しき春かな」と詠み、長能が、「身にかへてあやなく花を惜しむかな生けらばのちの春もこそあれ」などと詠んでいるのは、結構に思うのですが、この「花におくれてひと日やはむ」は、どういうものか、十分な表現ではないように思う。ただし、歌の姿はそれぞれ違っている。そこで持と判定する。

【注】○実国 藤原実国。後三条内大臣藤原公教（公教の母は顕季三女）の子。一一四〇—一一八三。○いとざくら しだれ桜。○手にかけて 「手に掛く」はこの場合、糸を手につける意味であるが、また自分の思うようにする心を含むものであろう。「源氏物語」竹河「手にかくるものしあらば藤の花松よりまさる色を見まじや」○小侍従 平安時代後期から鎌倉時代初期にかけての女流歌人。二条天皇等に仕出。生没年未詳。○はなにおくれて 花より後に残って。○すゑの句 下の句。○我が身にしあればをしき春かな 紀貫之の歌「又もこむ時ぞと思へどたのまれぬわが身にしあれば惜しき春かな」〔後撰集〕一四六）○いけらばのちの 藤原長能の歌「身にかへてあやなく花を惜しむかな生けらばのちの春もこそあれ」〔拾遺集〕五四）○仍よりにて。

【考察】左の歌は、「遠方」の「糸ざくら」に引かれる心を詠んでいるが、この糸桜の花は手の届かない女性の面影がありそうである。「我が手に掛けて見るよしもがな」の「手に掛く」は、糸桜の糸を手につける意味であるが、自分の思うようにする心でも用いられる。例えば『源氏物語』竹河に、次の歌が見られる。

手にかくるものしあらば藤の花松よりまさる色を見まじや
この歌は、大君の居室近くの松に藤の花の咲いているのを見て薫の詠んだ歌として出ているが、藤の花には大君の面影が託されていると見

るべきであろう。これと同様のことが左歌についても考えられるかと思う。

右の歌は、命があれば春には再び会えるにしても、花との別れが何よりもつらい旨を、「花におくれて一日やは経む」と強調して詠んでいる。上句を「命あらば」で始める歌い方は先行する用例が少なくない中で、具平親王の歌、

命あらばまたもあひなむ春なれどしのびがたくてくらすけふかな
〔千載集〕一三三）

は、上区全体が似たところがある。また下句に、花に取り残されては一日も過ごせない旨を言ったのは、俊成の判詞に指摘するように、いささか強調の度が過ぎているであろう。

俊成の判詞は、左歌に「をちかたのいと桜」を詠んだのを、「まことにおもひよりがたく、めづらしく見ゆ」と言い、目新しい題材を工夫したことを評価する。右歌については「をかしく」思われる点はあるが、下句は「あまりならむ」と言い、貫之や長能の春や花を惜しんだ歌と対照して、花を惜しむ心が度を超えて強調されている点を批判している。しかし「歌のさまとりどりなり」として、二首を持と判定する。穏やかな判定態度であろう。

二番

左勝

別当隆季

三うちよするいほへの波のしらゆふは花ちるさとのとほめなりけり

右

三河

四散りちらずおほつかなきにはなざかり木のもとをこそすみかにはせめ

左、風体は幽玄、詞義非二凡俗。ただし、花をしらなみ、しらゆふなどよむはつねのことなれど、なみによせつるときはうみ、川をひき、ゆふとかけつればもり、やしろともいへるや、よしありてきこゆらん。花ちる里のとほめならば、五百重のなみのしらゆふならずともや侍るべからん。右、ふることどもをとかくひきよ

せられたるうちに、かの伊せのみやすどころの歌は、山ちにて、古郷のとくいぶかしかりけるに、散りちらずきかまほしきをといへるこそ、ことにをかしきを、このもとの歌には不落おほつかなからむことばは、花をおもふ心しふかからずやきこゆらん。すゑに、すみかにはせめといひはてられたるほども、余情たらずやあらん。なほ、なみのしらゆふは歌のさまたけまさりてや。

【通釈】

二番 左勝

別当隆季

三打ち寄せる、幾重にも重なる波、白木綿のような波、——それは花の散る里の遠見の眺めであった。

右

三河

四花が散るか散らないか、心もとないので、花盛りには、その木の下を選んで住みかにしよう。

左の歌は、歌の姿は幽玄で、詞も心も平凡なものでない。ただし、花を白波や白木綿などとして詠むのは普通のことであるが、白波に例えた時は海や川を引き、白木綿と関連させた時は森や社を詠み入れたのが、より所があるものとして受け取られるであろうかと思う。そして花の散る里の遠見の様子を詠むのならば、「五百重の波の白木綿」と言わなくてもよいのではないかと思います。右の歌は、古歌をあこれ取り入れて詠んでおられる中で、あの伊勢の御息所の歌は、山道で、古里の花の様子が気に懸かり早く聞きたいと思った心から、「散り散らず聞かまほしきを」と詠んだのが、特に面白く思われるのであるが、花の咲いた木の下での歌となると、「散り散らずおほつかなき」というような言葉は、花を思う心あまり深くないものと受け取られるかもしれない。下の句に、「住みかにはせめ」とはつきり気持ちの言い切られたあたりも、余情が不足しているかと思う。やはり、「波の白木綿」と詠んだ（左の）歌の方が、歌の姿として格調の高さが優れているであろう。

【注】○隆季 藤原隆季。家成の子で、顕季の曾孫。一一二七—一一八五。○いほへの波のしらゆふ 幾重にも重なる、白木綿のような波。「五百重」は、幾重にも重なること。「五百重波」の語が『万葉集』（五七一、九三六、二四四一等）に見える。「白木綿」は、コウゾの皮をさらしたりして作った白い紐状のもので、神などにつけて神にささげる幣とした。「白木綿花」の語が『万葉集』（九一四、一一一、一七四〇、三二五二等）に白波の立つ様子の形容に用いられており、これに基づいて「波の白木綿」の語が平安時代後期に使われたと見られる（『堀河百首』一三七七公実の歌、「久安百首」八八二顕広の歌等）。○花ちるさとのとほめ 花の散る里を遠くから見た時の眺め。「花散る里」の語は、『万葉集』に「橘の花散る里」（一四七七等）の用例があり、『源氏物語』に源氏の歌として見える「橘の香をなつかしきほととぎす花散る里をたづねてぞとふ」（一六八）の場合も「花」は橘の花であるが、この左歌の場合は題が「花」なので桜の花。○三河 二条院内侍三河。藤原為業（寂念）の女で、歌林苑の会衆の一人。生没年未詳。○風体は幽玄 歌の姿は幽玄である。「風体」は、歌の心が詞に表現された状態を総合的に見て、様式としてとらえた語で、歌の「姿」と同様の内容を表す。「幽玄」は、基本的には奥深さ、あるいは世俗から隔たる遠さを表す語として、歌論の方面では『古今集』真名序以来用いられているが、判詞では基俊を経て俊成が使い生かしている。○詞義 歌の詞と心。○ふることもとかくひきよせられたる 古歌をあこれ取り入れておられる。この場合右歌に関して「ふることも」とされる歌は、「散り散らずきかまほしきをふるさとの花見てかへる人もあはなん」（『拾遺集』四九、伊勢）の外、「木のもとをすみかとしればおのづから花見る人になりぬべきかな」（『金葉集』三奏本四九、花山院）などであろう。○伊せのみやすどころ 伊勢の御息所。伊勢守藤原継陰の女で、『古今集』の代表的女流歌人。宇多天皇に愛され、皇子を生んだ。生没年未詳。○山ちにて 山道で。伊勢の「散り散らず……」の歌の詞書に、「斎院屏風に、山みちゆく

人ある所」〔拾遺集〕、また「御屏風歌 山に花みにいそぎゆくところ」〔伊勢集〕とある。○落不落 群書類従本、歌合部類版本等には「散不散」とある。○たけまさりてや 格調の高さが優れているであろうか。「たけ」は、歌については格調の高さを意味し、「たけあり」「たけ高し」等の形で評語に用いられた。

【考察】左の歌は、上句に「うち寄する五百重の波の白木綿は」と、白波が揺れ動いて一面に連なるイメージを示し、下句にそれが「花散る里の遠目」であることを言っている。「花散る里」の遠景を、現実の里から離れて、揺れ動く茫漠とした白の世界として描き出したような作である。用語の面では『万葉集』に見える古語が用いられているが目立つ。

右の歌は花に引かれる心を詠むが、伊勢の

散り散らずきかまほしきをふる里の花見てかへる人もあはなん
〔拾遺集〕四九

の歌により、その下句に花山院の「木のもとをすみかとするれば……」〔金葉集〕三奏本四九の歌を取り入れたような作である。

俊成の判詞は、左歌について、「風体は幽玄、詞義非二凡俗」と評している。この批評は、用語の点から見て、『和歌体十種』の「高情体」の説明に、

此体、詞雖二凡流^一、義入二幽玄^二。

とあり、またこれに基づいたと思われる基俊の『奈良花林院歌合』祝二番判詞に、

言凡流をへだてて幽玄に入れり。

とあるのなどから影響を受けた可能性が考えられる。

そして、この俊成の批評を左歌に即して見ると、左歌のイメージの表わす現実を超えた世界の幽遠な特長を中心にとらえたのが、「風体は幽玄」という評語ではなかったか。また、その高い精神的世界が『万葉集』の古語を生かした簡素な形で表現され、格調の高さが感じられると見て、「詞義非二凡俗」と評しているのではないか。これは判詞

の最後に記された「歌のさまたけまさりてや」という「たけ」の高さを挙げた批評とも符合するところであろう。

一方、右歌に対して俊成は二つの点を批判する。その一つは、右歌が伊勢の「散り散らずきかまほしきを……」の歌の語句をほとんど変えず「散り散らずおほつかなきに……」と用いた点で、伊勢の歌は古里の花の様子が早く知りたいたいと思う心が出てくるから面白いが、右歌で花の木の下を住みかしようという場合には「花を思ふ心」が「深からず」と見られると批判する。今一つは、右歌が下句を「住みかにはせめ」と言い切った点で、これを「余情たらず」と批判する。

俊成の左右の歌に対する批評を対照して見ると、左歌については「風体は幽玄、詞義非二凡俗二」、「歌のさまたけまさりてや」などと評し、歌全体の姿の特長として、幽遠なものが感じられる点や、心が詞に表現されたところが卑俗な世界を離れ、格調の高さが認められる点を評価している。一方、右歌については、「心ふかからず」、「余情たらず」などと評し、思い入れの浅い点、表現のあらわ過ぎる点を批判している。俊成の批評の主要な基準が、左右の歌に関して示されたところがあるように思う。

三番 左

宰相中将宗家

五はるはただ花さくよもの山ごとまここにころをさへもちらしつるかな

右勝

弁殿下女房

六またさかむはるにこころのかからずはちりゆく花に身をやかへまし

左、歌のさまをかしく侍るを、花によりよものやまに心をちらすこと、ちかきよの歌ども、よみたまへしこちする。右歌は、すゑの句いかにぞ、ことたらぬところある心地すれど、春に心のかからずはなどいへる心すがた、右はまさるべく。

【通釈】

三番 左

宰相中将宗家

五春はただ、花の咲く四方の山のそれぞれに心を引かれて、花の散る

のとは別に、心まで散らしてしまった。

右勝

弁殿下女房

六再び花の咲く春に、もし心が引かれることがないなら、散つてゆく花に、この身を替えたいと思います。

左の歌は、歌の姿は面白いと思いますが、花のために四方の山に心を散らすことは、近いころの歌に、詠んだ前例がありましたように思います。右の歌は、下句がどういふものか、表現の不十分などころがありそうな気がするけれど、「春に心のかからずは」などと詠んでいる、その心や姿の点で、右の方が勝るであろう。

【注】○宗家 藤原宗家。中御門内大臣藤原宗能の子で、母は顕季の孫。一一三九—一一八九。○弁 『平安朝歌合大成』に次のように注せられる。「石清水別当紀成清女か。葉室光親室という。それならば小侍従の姪にあたる。「殿下女房」と註せられているので、関白基実（七月廿六日薨）の家女房であったのであろう。」○まさるべく 群書類従本・歌合部類版本では「まさるべくや」。

【考察】左の歌は、「花さくよもの山ごと」に「心を引かれて、花の散るより前に「心をさへも散らしつるかな」と詠む。方々の花に心を散らすのを、花の散るのに結びつけた作である。ただ、こういう発想は源雅実（一〇五九—一一二七）の歌にすでに見られる。『新勅撰集』から、詞書とともにその歌を引く。

寛治七年三月十日、白河院きた山の花御覧じにおはしませける
日、処処尋花といへる心をよませたまうけるに

久我太政大臣

山ざくら方もさだめずたづぬれば花よりさきにちる心かな（五五）
また、『久安百首』にも、待賢門院堀川の次の歌が見られる。

いづかたに花咲きぬらんとおもふより四方の山辺にちる心かな
（一〇二三）

この歌は『千載集』（四二）にも収められるが、同様の発想で、「四方の山」の語もここに用いられている。

右の歌は、再び花の咲く春に心引かれることがなければ、「散りゆく花に身をやかへまし」と詠む。散る花にわが身を替えたいと、花を惜しむ心であろう。

俊成の判詞は、左歌について、「歌のさまをかしく」と言う一方で、同様の発想の歌の先例がある点を指摘する。等類の作として否定したものである。対する右歌の心姿を挙げて勝るとしたのは妥当な判定であろう。

四番

左持

左大弁雅頼

七春風にうごかぬ雲と見えつるはまだちらぬまのさくらなりけり

右

右京大夫殿下女房

八さくらばなさかりになれば芳野山ふもとのさとに旅ねをぞする

左歌、華のけしきしづかに、歌合歌と見え侍るが、うごかぬ雲といへることはや優にしもきこえざらん。雲と見え侍ることも、山などやあらまほしからむ。右歌は、ことなるとがなけれど、かやうの心つねのことに待れば、持と見えたり。

【通釈】

四番

左持

左大弁雅頼

七春風を受けて、動かぬ雲——と見えたのは、まだ散らぬ間の（咲き満ちた）桜の花の雲であった。

右

右京大夫殿下女房

八桜の花が、花盛りになると、吉野山のふもとの里で旅寝をするのである。

左の歌は、咲いた花の様子も静かな情景を詠んでおり、歌合の歌と言うのにふさわしい作と見られますが、「動かぬ雲」と詠んだ言葉は、優美には聞こえないであろう。「雲と見え」とありますのも、山などが併せて詠まれているのが望ましいであろうと思ふ。右の歌は、取り立てて言うほどの欠点はないけれど、こいう心は普通歌に詠まれることでしようから、持と考えられる。

【注】○雅頼 源雅頼。中納言雅兼の子。妻は藤原家成の女で、顕季の曾孫。一一二七—一九〇。○右京大夫 伝記未詳。「殿下女房」の注によれば、撰政基実^{もと}に仕えた女房。○歌合歌 群書類従本・歌合部類版本は「歌合の歌」。後の為家『詠歌一体』では、「歌合の歌は、殊に失錯なく、人の難じつべからむ事をかねてよくよくみるべし。たけも有^あ、物にもうつましからむ姿を詠むべし。これを晴の歌と申^まめり」と言い、その例として「山桜さきそめしよりひさかたの雲るにみゆる滝の白糸」以下の歌を挙げている。

【考察】左の歌は、春風に動かぬ雲と見えたのは桜であったと詠む。しかし、雲に桜の花を見立てる趣向の歌は古来多い。その内次の藤原公実の歌などは左歌と詠み方が似ている。

白雲とをちの高ねに見えつるは心まどはすさくらなりけり（『金葉集』三二六）

右の歌は、桜が花盛りになると吉野山のおもとの里で旅寝をする^と詠む。ただ、桜の花のあたりで旅寝をする趣向の歌も少なくない。次の作者未詳の古歌などが見られる。

この里に旅ねしぬべし桜花ちりのまがひに家ぢわすれて（『古今集』七二）

これよりも右歌は詠み方が一層素朴であろう。

俊成の判詞は、左歌については「歌合の歌」としての格調を認めているが、また難点も挙げています。難点の一つは「うごかぬ雲」という言葉が優美に感じられない点、今一つは花が「雲と見え」と言う以上（遠山の桜なので）山を併せて詠み入れる方が望ましいと思われる点である。いずれも伝統的な詠み方を考慮した批判と思われるが、その限りでは説得性のある批評であろう。右歌については、取り立てて挙げるほどの難点はないが、「かやうの心」は「つねのこと」とし、内容に新しい特長がないと見て、持と判定する。左右共にさして評価しない歌としての持であろう。

五番 左持 中宮亮重家朝臣

九小はつ瀬の花のさかりを見わたせば霞にまがふみねのしらくも

右 兵庫頭頼政

一〇あふみぢやまの浜辺に駒とめてひらのたかねの花を見るかな

此左右の歌、已如^下看「陵雲台」在中望海楼上。いづれもまことに見どころ侍るかな。それにとりて、左歌は、後撰集にもいれるにや、すがはらやふしみの暮に見わたせば霞にまがふをはつせの山、といへる歌を、はなの歌にひきなされたるなるべし。かやうのことは、いみじくはからひがたきことになん。ふるき名歌も、よくとりなしつるは、をかしきことなむ、ふるき人申し侍りし。白氏文集、古万葉集などは、いささかとりすぐせるに、とがなきにやあらむ。まことによくなりけるものは、かれをまなべると見ゆるに、なさけそふわざなればなるべし。ただし、ふるき名歌をばとるべきこと、いむなりなむどはおもたまふるに、かのふしみのくれにといへる歌をことに心にそめならひにければにや、このかすみにまがふみねのしら雲と侍るも、いみじくをかしくおほえ侍るなり。右歌の、まのわたり眺望も、いとをかしくおもひやられて、ひらの高ねをたちまざるとまうさは、みねのしら雲すてがたく、をはつせ山に心よせむとすれば、ふるきとが、さだめがたし。よりて持と申すべきや。

【通釈】

五番 左持 中宮亮重家朝臣

九初瀬山の、花盛りをはるかに見渡すと、霞に紛れて、峰の白雲のよ
うな山桜が定かでない。

右 兵庫頭頼政

一〇近江路の、真野の浜辺に馬を止めて、比良の高嶺に咲く花を眺めるのです。

この左右の歌は、風景をあたかも凌雲台で眺めたり、望海楼に

いて見たりした時のように（大きく）描いている。いずれも実に見所があります。ところで、左の歌は、『後撰集』にも入っていたかと思う一首、「菅原や伏見の暮に見わたせば霞にまがふを初瀬の山」と詠んだ歌により、花の歌として詠まれたものであろう。このような歌い方は、（どう扱うべきか）非常に取り計らいにくいと思います。ただ古い名歌も、上手に扱って用いたのは面白いものだと、古人が申しました。『白氏文集』や『万葉集』などの詩歌は、多少取り入れ過ぎた感があっても、差し支えないのであろう。これは、真に十分に完成した作は、あの古歌によったと見えることで、情趣が加わることになるからである。しかし、古い名歌をとり入れて詠むのを可とすることにについては、避けるものなどと言われる点も考えてみるのです。あの「伏見の暮に（見わたせば霞にまがふを初瀬の山）」と詠んだ歌には特に心を深く寄せ習わしたせいか、この「霞にまがふ峰の白雲」と詠まれていますのも、きわめて面白く思われるのです。一方、右の歌の、真野の辺りの眺望の様子も、大層面白く思いやられて、この比良の高嶺の花を見る歌を勝ると申したい気もしますが、そうすれば（左の）峰の白雲の歌が（見捨てられるようで、）やはり捨て難く思われ、その小初瀬山の歌に味方しようとすれば、古歌によることの難点が気になって、判定しにくい。そこで持と申すべきかと思う。

【注】○重家 藤原重家。顕輔の子で、清輔・顕昭らの兄弟と共に六条藤家を継承した。この歌合の主催者。一一二八—一一八〇。○小はつ瀬 を初瀬。「を」は接頭語。大和の国の歌枕。今の奈良県桜井市初瀬町。○頼政 源頼政。歌林苑の会衆の一人。武将としては以仁王を奉じて平家と戦い、敗れて宇治で自害。一一〇四—一一八〇。○真野 近江の国の歌枕。今の滋賀県大津市真野。○ひらのたかね 比良の高嶺。近江の国の歌枕。今の滋賀県滋賀郡の、比叡山の北に連なる山地。○陵雲台 凌雲台のことであろう。中国で昔、魏の文帝が洛

陽に築いた楼台。○望海楼 望海台のことか。望海台は河北省滄県の東北に築かれたという。○すがはらやふしみの暮に見わたせば霞にまがふをはつせの山 『後撰集』（一一二四）に見える、よみ人しらずの歌。詞書に「伏見といふ所にて、その心をこれかれよみけるに」とあり、「伏し見」という意味を生かした歌なので「暮に見わたせば」と詠まれる。なおこの歌の「菅原」の「伏見」の地は、大和の伏見で、今の奈良市の西部に当たり、山城の伏見すなわち京都市伏見区の辺りとは異なる。「霞にまがふをはつせの山」は、霞に紛れて初瀬の山が見分けられない意。○白氏文集 唐の白居易（楽天）の詩文集。○古万葉集 『袋草子』には、『万葉集』について、「この集、末代の人『古万葉集』と称す。（中略）これ新撰万葉集もしくは菅家万葉集等有るの故か」と記す。また『古今集』真名序には『古今集』の原形を『続万葉集』と言った旨を記すので、これに対して『古万葉集』と呼んだとも言われる。『古万葉集』の名称は、『源順集』を初め、『源氏物語』（梅枝）、「枕草子」（集は）等にもその用例が見られる。○なさけそふ 情趣が加わる。

【考察】左の歌は、初瀬の花盛りの遠景を、「見わたせば霞にまがふみねのしらくも」と詠んでいる。俊成の判詞に言うように、

菅原や伏見の暮に見わたせば霞にまがふを初瀬の山（『後撰集』一一二四二、よみ人しらず）

の古歌によったと見られ、いわゆる本歌取に属する作であろう。「霞にまがふ峰の白雲」は、峰の白雲のような山桜が霞に紛れて見定め難い様子を言ったと思われる。

右の歌も「比良の高ね」の花の遠景を見ることを詠んでいるが、これは花の遠景に焦点を絞らず、近江路の「真野の浜辺」に馬を止めて見ると詠み、見る人の位置と動作を併せてとり上げている。言い換えると、花のある地名と花を見る地名とを、見る人の動作を中心に結び合わせたような作である。細かい描写を捨てた単純な詠み方であるが、それだけに全体の大景を印象的に表しているとも言える。

俊成の判詞は、花の遠景を見る点で題材は同様でも、詠み方を異にする左右の歌について、それぞれ特長を認めて結局持と判定しているが、特に左歌が古歌によって詠まれていた点に関して考えを述べるところが多い。そしてこの部分は、いわゆる本歌取についての俊成の見解の示された早い例として注目される。

この俊成の本歌取についての見解を、改めて順に挙げると、次のようになろうか。

- (1) 古い名歌も、上手に扱って歌に用いたのは面白いものだと言った。
 - (2) 『白氏文集』『万葉集』などの詩歌は、多少取り入れ過ぎた感じがあっても差し支えないのではないか。
 - (3) 真に完成した作は、あの古歌によったと見えることで情趣が加わる。
 - (4) しかし、古い名歌を取り入れて詠むのは避けるものとされる点も考えてみる。
 - (5) けれども、この左歌は自分が本歌に親しんだためか、大層面白く思われる。
- (1)は本歌取を肯定する見解（古人の言の引用）、(2)はその補足、(3)はその理由の考察で、(4)は一転して本歌による詠み方を否定する立場に立つての反省、しかし(5)で左歌の場合本歌に親しんだためか大層面白く思われるとして、これを肯定する立場をとっている。起承転結とも言える順序で、左歌の本歌取を評価していると見られる。ただし、その評価には多少のためらいも残しているようである。この点は判詞の末尾に、左歌を高く評価しようとするれば「古きとが、定めがたし」と言っているので、古歌によって詠むのを否定する見方が、なお心に掛かっていたと思われる。
- こういう本歌取についての俊成の見解は、過去の見方を踏まえて形成されたのであろう。差し当たり俊成の師の基俊の見方を、長承三年『中宮亮頭輔家歌合』月十番での左歌に対する判詞によって見ると、

心にも見れば入りぬる月影を山のはのみとおもひけるかな（親隆）
に対する基俊の判詞に、

此歌は、後冷泉院御時の歌合に、大式三位所^レ詠秀歌也。于^レ今多在二人口^一。文字頗雖^二相違^一、大意無^レ違。本歌云、山のはも名のみなりけり月影はながむる人の心にぞ入る。誠与^二故心^一相通事者、甚興あることにはべれど、歌合之所頗可^レ避事歟。

とある。ただし基俊が本歌として引いた歌は、『大式三位集』では第三句以下が同じでなく、

山のはも名のみなりけりみる人の心にぞ入る秋のよの月（一一）
となっており、『後拾遺集』では第三句以下が「みる人の心にぞ入る冬^レのよの月」となっているが、本来同じ歌であろう。ともかくこの大式三位の歌を、基俊は昔の「秀歌」で今も愛誦される歌として挙げ、この「本歌」によった左歌が「故心」に通じていることは「甚興あること」だと言っている。ただこれは、左歌を肯定して、そう言ったのであろうか。本歌の中心になる心をそのまま用いた点について皮肉を言っているのではないか。それで続けて歌合の場合「頗可^レ避事」と否定したところに基俊の本心が出ていると思う。

この基俊の判詞の内容をそのように見ると、当面の俊成の判詞は、語句に似た点はあるが内容は同じでないと思われる。基俊が昔の「秀歌」と共通する心で詠まれた歌を「甚興あること」と言うのと、俊成が「古き名歌」を「よくとりなしつる」歌を「をかしきこと」と古人がしたと言うのとは、内容が異なる。俊成は、「古き名歌」の心をそのまま取り入れるのではなく、新しく上手に生かして取り入れるのが「をかしきこと」と見たと思われる、本歌を取ることの積極的な意味に注目しているのであろう。それで基俊が本歌の心まで取るのを「頗可^レ避事」としたのは、俊成も同様の考えで、その意味で「古き名歌をば取るべきこと、忌むなり」と省みたのであろう。

なお、本歌取については俊成の見解が『俊頼髓脳』の中に見える。俊頼は、

歌をよむに、古き歌に詠み似せつればわろきを、いまの歌詠みま
しつれば、あしからずとぞうけたまはる。

と言ひ、その例として、

もみぢせぬときはの山は吹く風の音にや秋をききわたるらむ〔古
今集〕二五二

もみぢせぬときはの山にすむ鹿はおのれなきてや秋をしるらむ
〔拾遺集〕一九〇

など、本歌と本歌によって詠んだ歌とを挙げ、

これがやうに、よみまさる事のかたければ、かまへて詠みあはせ
じとすべきなり。

と言つてゐる。この俊頼の見解は、『新撰髓脳』の見解に基づくこ
ろもあるらしいが、本歌とする古歌の模倣に終ることを戒める一方、
本歌より勝るならば「あしからず」と聞くと記している。

本歌を取ることについての俊成の見解は、基俊や俊頼が模倣を避け
るべきこととして戒めてゐる点を考えに入れる一方、本歌を上手に生
かして取ることに関心をもち、具体的に考へてゐる点で、基俊はもち
ろん俊頼よりも積極的な姿勢が見られるようである。

本歌取の技法を理論的に整備したのは定家であるが、それ以前に本
歌取の意義を認めて積極的に生かす方向をとつた俊成の、早い時期の
考へがここに見られることに、注目しておきたい。

【備考】五番左歌は『千載集』(七四)に、右歌は『新続古今集』(一
三〇)に(第四句「ひらの高ねに」の形で)、収められている。

六番

左持

若狭守経盛朝臣

一 一さくらさくみねをあらしやわたるらんふもとの里につもるしら雪

右

右京権大夫師光

一 二さくら花としのひととせにほふともあかやこのよつきな
ん

左、峰のあらしをわたし、ふもとに花をちらすさまなる、心は

つねに見ゆるこちすれど、此ふもとの里につもるしら雪は、
すがたもいとをかくこそ。右歌、ことにめづらしくはあらね
ど、年のひととせにほふともなど、いひしれるさまにて、はな
をおもへる心もふかく待めり。かみしもの句のはじめの文字、
おなじきことぞ、ふるき歌合にとがとせるやうにおほえ侍る。
ただし、かれこれをなすらふるに、これも持と見えたり。

【通釈】

六番

左持

若狭守経盛朝臣

一 桜の咲く峰を、嵐が吹き渡つているのであろうか、——ふもとの
里に積もる花の白雪よ。

右

右京権大夫師光

一 桜の花は、もし一年中咲きにおつても、それでも見飽させぬまま、
この一生が終わることになりそうだ。

左の歌は、峰に嵐の吹き渡ることを詠み、ふもとに花の散る様
子をとり上げたもので、こういう発想は普通よく見掛けるよう
な気がするが、この「ふもとの里につもる白雪」と歌つたのは、
歌の姿としても大層面白く思われる。右の歌も、特に目新しく
はないけれども、「年のひととせにほふとも」などと詠んだのは、
歌の詠み方を心得ている風で、花を思つている心も深いものが
あるようです。ただ、上下の句の初めの文字が同じ(「さ」)で
あることは、古い歌合で欠点としていたように思います。しか
し、左右の歌を比べると、これも持と思われれます。

【注】○経盛 平経盛。平清盛の弟で、壇の浦の合戦に敗れて入水し
たが、平家一門を代表する歌人であつた。一一二四—一一八五。○師
光 源師光。大納言師頼の子で、法名は生蓮。歌人としては六条藤家
や歌林苑の歌人と近い関係にあつた。生没年未詳。○としのひととせ
一年中。『伊勢物語』二十四段の「あらたまの年の三とせを待ちわ
びて……」の歌などに見える「年の三年」の語の影響で使われるよう
になった語か。『清輔集』(一一三六)や『林葉集』(二二六四)にも用例

がある。

【考察】左の歌は、峰の花を嵐が散らしているのだろう、と上句に推量し、その根拠として下句に、山の下に花の散りしく様子を詠んでいる。こういう発想は先行作に見られ、

花さそふあらしや峰をわたらん桜なみよる谷川の水（『金葉集』

五七、源雅兼）

などは、特に上句が類似している。ただ、この左歌の下句には、作者独自のものが見られる。

右の歌は、桜の花は仮に一年中咲き続けたとしても、自分は一生飽きることはあるまいと、花に対する強い愛着の心を歌っている。

俊成の判詞は、左歌に対しては、その発想が目新しいものでない点を指摘する一方で、下句「ふもとの里につもる白雪」を取り上げて「姿もいとをかしくこそ」と評価している。これは体言止めで、積もる花の白雪を印象づけ、上句の心に対応させた点を、歌全体の姿の上から評価したものであろうか。

右歌に対しても、特に珍しい作ではないと批判する一方で、「年のひととせにほふとも」といった表現を「言ひ知れるさま」と評し、また花への思い入れの深さを「心もふかく」と評価している。ただそれに続けて、上下の句の最初が同じ「さ」の文字である点を、古来の歌病の観点から指摘している。「古き歌合」で「とが」としたと言っているが、これは天徳四年『内裏歌合』で、十八番右歌、

ことならばくもみの月となりなむこひしきかげや空に見ゆると
（中務）

に対する判詞に、「上下の句の上に、同じ文字ぞあめる、にくさげにぞ」とある（ただし「させる難にはあらぬ」とされる）ことなどによった指摘であろう。

【備考】六番右歌は『新勅撰集』（一〇五）に収められている。

七番

左持

前少将公重朝臣

一三吉野やまはなのさかりになりぬれば木ずゑにおつるたきのしら糸

右

前豊後守頼輔

一四春の日のけしきに花のたりせばのどかにほふ色は見てまし

左歌、梢におつるといへるすがた、をかしくも見ゆ。ただし、ちかくも、雲井に見ゆるたきのしらいとなむどいへるぞ、をかしくこそ待るを、これは梢におつるといへれば、梢より上にはたきやはあらんとぞおほゆる。右歌は、ふかやぶが、春はさばかりのどけきを花のこころやなにそぐらんといへる。おもひいでられて、いとをかしくおもうたまふるが、すゑの句の、いろは見てましといへるほど、またすこしたらぬこちすれば、これも又ちとす。

【通釈】

七番

左持

前少将公重朝臣

一三吉野山は、花盛りになると、こずえに落ち掛かつて見える（花の）滝の白糸よ。

右

前豊後守頼輔

一四春の日の様子に、もし花が似ていたとすれば、のどかに咲きにお花の色を見ることができたであろうに。

左の歌は、「梢におつる」と詠んでいる歌の姿が、面白とも見える。しかし、近いころにも、「雲井に見ゆる滝の白糸」などと詠んでいるのは、実に心をひかれるのですが、この左歌は、「梢におつる（滝の白糸）」と詠んでいるので、梢より上に滝があるうかという風に思われてくる。右の歌は、深養父が、「（うちはへて）春はさばかりのどけきを花の心やなにそぐらんと詠んでいるのが、思い出されて、大層面白く思いますが、下の句の、「色は見てまし」と詠んでいるあたりが、やはり少々表現が不十分なように思われるので、これも持と判定する。

【注】○公重 藤原公重。権中納言通季の子。一一一九—一一七八。

○たきのしら糸 滝の水が流れ落ちる様子を白糸に見立てて言う語。

ここでは満開の桜の花をそれに例えた。○頼輔 藤原氏で、本名は親忠。大納言忠教の子。一一二一一一八六。○雲井に見ゆるたきのしらいと 源俊頼の歌「山桜さきそめしよりひさかたの雲ぬに見ゆる滝の白糸」。この歌は『高陽院七番歌合』桜七番右歌(一四)で、『金葉集』(五〇)等にも収められる。山の桜が咲き初めてから、はるかな空に掛かって見える(花の)滝の白糸よ、との歌意。歌合で判者源経信は「きららかに詠まれたる」と評している。○ふかやぶ 清原深養父。『古今集』初出の歌人。生没年未詳。○春はさばかりのどけきを花のころやなにいそぐらん 清原深養父の歌で、初句は「うちはへて」(久しく続いて、の意)。二句以下をここに引用したもの。『後撰集』(九二)に収められている。

【考察】左の歌は、公重の歌集『風情集』(二二七)に「花」の題で収められており、吉野山の花盛りの様子を詠んでいる。この歌と同じ上句をもつ藤原為業(寂念)の歌が『千載集』(七〇)に見える。

吉野山花のさかりになりぬればたぬときなき峰のしら雲

下句は、この為業の歌が峰の桜の遠望を白雲に見立てているのに対して、公重の左歌は、「木ずゑにおつる滝の白糸」と、こずゑの花を「滝の白糸」に見立てている。ただ、この花を「滝の白糸」に見立てるところとは先例があり、俊成も判詞で言及しているとおろし、源俊頼の歌、

山桜さきそめしよりひさかたの雲ぬに見ゆる滝の白糸(『金葉集』

五〇)

に山桜の遠景を描くのに用いられている。それと比べると、左歌では「木ずゑにおつる」ものとして「滝の白糸」を出している点が異なるが、俊頼の歌の「雲ぬに見ゆる滝の白糸」ほどの鮮明なイメージを伴わないのではないか。

右の歌は、もし花の心が春の日の(のどかな)様子に似ていたとすれば、のどかに咲きにおう花を見ることができただろうに、と詠む。花が散り急ぐと見、花を惜しむ心の作である。それで俊成が判詞に引く深養父の歌、

うちはへて春はさばかりのどけきを花の心やなにいそぐらん(『後撰集』九二)
と基本的には共通した心に基づく作であろう。またその意味では、紀友則の歌、

久方のひかりのどけき春の日にしづ心なく花のちるらむ(『古今集』八四)

とも共通した点があると言える。ただ現実には仮定の条件を上句に設け、それに応じて推量されることを下句に詠む形をとる点は異なるが、こういう形は例えば在原業平の歌

世の中にたえてさくらのなかりせば春の心はのどけからまし(『古今集』五三)
などにも見られる。

俊成の判詞は、左歌に対しては、「木ずゑにおつる(滝の白糸)」と詠んだところを「姿をかしく」と一応評価するが、俊頼の歌の「雲ぬに見ゆる滝の白糸」(『金葉集』五〇)と比較して、そのイメージに問題がある点を指摘する。

右歌に対しては、深養父の歌(『後撰集』九二)が思い出されると言い、この点は「いとをかしく」思われると評価しているが、下句に「色は見てまし」と詠んだところを「すこしたらぬこち」がすると批判する。これは表現を不十分と見ての批判であろう。

八番 左

左少将通能朝臣

二五としを経てをしむにとまる花ならばいくへかいまはさきかさねまし

右勝

侍従有房

一六ねにかへる時を見むこそかなしけれ花にさきだついのちともがな

左、風情すぎたる心ちやすらん。右もあまりなることばどもやとぞ思うたまふれど、ねにかへるといひて、花にさきだつなどいへる心をかしくも見ゆれば、右勝と申すべし。

【通釈】

八番 左

左少将通能朝臣

一五長年にわたって、花が惜しめば散らずに残るものだったら、今では幾重に重なって咲いていることだろうか。

右勝

侍従有房

一六花が散って、その根にもどる時の様子を見るのは、実に悲しい。花に先立って消えるわたしの命であってほしい。

左の歌は、趣向の度が過ぎた感があるかと思う。右の歌も(同様に)度を越えた歌い方をしているかと思いますが、(上句に)「根にかへる」と詠んで、(下句に)「花にさきだつ」などと詠んだ心は面白いと思われるので、右の勝と判定しましょう。

【注】○通能 源通能。権中納言雅兼の子。生年未詳、一一七四年没。

○有房 源有房。大藏卿師行の子。生没年未詳。○ねにかへる 根に帰る。元にもどる。『金葉集』に「ねにかへる花の姿の恋しくはただこの下を形見とは見よ」(六〇五、実行)の歌が見える。古くは『和漢朗詠集』に「花悔^{ハハ} 帰^キ 根無^{ネム} 益^{ユク} 悔^{クニ} 鳥期^{トウキ} 入^イ 谷定^{ヤチヨウ} 延期^{チンキ}」(六一、藤滋藤「閏三月」)の詩句が見える。○いのちもがな 命であってほしい。「ともがな」は、格助詞「と」に終助詞「もがな」の付いた語で、願望の意を表す。○風情すぎたる 趣向が度を超えている。『俊頼髓脳』に「風情あまりすぎたるやうなる歌」として、「大空をおほふばかりの袖もがなちるかふ花を風にまかせじ」等の歌を挙げる。

【考察】左の歌は、「惜しむにとまる花ならば」と仮定して、その場合、花は幾年もの間に「幾重か今は咲き重ねまし」と想像している。これと似た仮定をした歌に、俊頼の、

身にかへて惜しむにとまる花ならば今日やわが身の限りならまし
〔『金葉集』三奏本六七、詞花集〕四二では第四句「今日やわが世の」

などがあるが、左歌の場合は、花を惜しむ心よりも、現実において得ない幾重にも咲く花の様子を想像するのが眼目のように見える。

右の歌で「花にさきだつ命ともがな」と願うのも、現実離れのした願望とも言えるであろうが、これは上句に花の散るのを惜しみ悲しむ心が詠まれているので、その心を強調したことは明らかである。

俊成の判詞は、左の歌に対して「風情すぎたる」と言い、右の歌に対して「あまりなる」と言い、共に趣向が度を越えた点を批判しているが、右歌で花が「根にかへる」と言い、「花にさきだつ」命であってほしいと詠んだ心は「をかしくも」見えると言い、右の勝とする。「根」と「花」、「かへる」と「さきだつ」を対応させた点を一応評価したのであろう。

九番 左持

前中務少輔季経朝臣

一七はるかぜやかへりて我をうらむらんのことさず花ををりつくしつる
右 右馬権守隆信

一八年を経てつくす心をあはれとやにほひをそへてはなもさくらん

左歌、春のかぜのうらむまで、さしも花ををりつくしけんこと、いかなりけることにか。右歌、としをへて心をつくすによりて、はなのほひそへんこと、花の芳心ことのほかにやあらん。さほど思ひにかなふ花ならば、ただつねのほひながら、ちらでをいましばしもなどやおほゆる、しからむ。されど、をりつくしてむはなよりは、にほひそへたらんはまさるべけれど、また、としをへて、句をそへてといへる、声その字おなじことにやと見ゆれば、なほ持などにぞ。

【通釈】

九番 左持

前中務少輔季経朝臣

一七春風は、(花を散らすくせに)かえって私を恨んでいるであろう、
——花を(めであるあまり)残さず折り取ってしまった。

右

右馬権守隆信

一八長年の間、花に思いの限りを尽くす(私の)心をあわれんで、花も(美しい)色を加えて咲いてくれるのであろうか。

左の歌で、春の風が恨むまで、そんなに花を折り尽くしたというのは、一体どういうことであつたのであろうか。右の歌は、長年花に心を尽くしたために、花が色を加えるのだからと詠んでおり、こういう花の芳情は格別のものではあろう。(ただし)それほど思いにこたえてくれる花ならば、ただ普通の色のままで、散らずに今しばらく咲いてほしいなどという気になるのが、しかるべきであらう。しかし、折り尽くした花よりも、色を加えた花の方が勝るに違いないが、一方、(右歌は第一句に)「年をへて」と詠み、(第四句に)「にほひをそへて」と詠んでおり、これは音ないし字に同じものがある(歌病)かと思われるので、(判定としては)やはり持というあたりが相当と思う。

【注】○季経 藤原季経。顕輔の子で、重家の同母弟。一一三一一—一二二一。○隆信 藤原隆信。実父は為経(寂超)。母の美福門院加賀が俊成と再婚したので、俊成が養父にあたる。一一四二—一二〇五。○にほひ ここでは、美しい色つや。○芳心 美しい心、また親切な心。芳情。○声 ここでは、字音。

【考察】左の歌は、花を残さず折り尽くしたので、花を散らす春風がかえって私を恨んでいるであらう、と詠む。花を散らす風を人が恨むのは、自然なこと、

花ちらす風の宿りはたれかしる我にをしへよ行きてうらみむ(『古今集』七六、素性)

などと詠まれているが、それに対して左歌は、花を奪った人を春風が恨む場合を趣向して、特色を出そうとしたのであろう。

右の歌は、花に長年思いを尽くした心を花がかわれみ、一層美しく咲いているのだから、と詠んでいる。

俊成の判詞は、左歌に対しては、風が恨むまで花を折り尽くしたとはどういうことかと、趣向の不自然に思われる点を一言で批判し去っている。

右歌に関する批評は、左歌の場合より長いが、その内容は三つに分

けられると思う。第一に、花が少しの間でも散らずにいてほしいと願う心を詠むべきであらうと言う。これは花の歌は花へ向ける深い情を詠むべきものと考えた立場からの批判であらうか。第二に、左歌のように折り尽くした花を詠むよりは、右歌のように色を増す花を詠む方が勝ると評価する。これは題を積極的に扱った歌の方を勝るとする伝統的な評価態度に基づくものであろう。第三に、「年をへて」と「にほひをそへて」との句末に同字がある点を、歌病(文字病)の観点から批判している。

このように見てくると、俊成の右歌に対する批評は、伝統的な見方に基づいているが、難点として挙げるところは左歌の場合ほど大きな欠点ではないように思われる。その意味では持という判定は右歌に厳し過ぎるとも見える。そうであれば、あえて推測すると、右歌の作者隆信が俊成にとつて義理の子であるのに対して、左歌の作者季経はこの歌合の主宰者重家の実弟であるから、六条家主宰の歌合に判者になつた俊成がこの人間関係に配慮して判定した可能性も考えられるかと思う。

十番

左持

前少納言資隆

一九しら雲の八重かさなりて見えつるは奈良のみやこのさくらなりけり

右

僧顯昭

二〇をちこちにほふさくらや春ごとに人のこころにかかるしらくも此左右のしら雲、いづれもきよげに見ゆるにとりて、左は八重桜のよしならば、雲のやへと見えんこといかが。また雲のやへかさならんことは、山などにもかげとほきほどなどやよろしくきこゆらん。されど、やへざくらといふ、かたつかたの心につきては、たくみにをかしきこゆるに、また、なりの字ぞふたつところはべるめる。右は、すがたなどいますしし優には見ゆるを、ちかくもかやうなること見たまへしこちぞすれど、た

しかならず。うたごまはともにをかしければ、また持と申すべし。

【通釈】

十番 左持

前少納言資隆

一九白雲が八重に重なっていると見えたのは、奈良の都の（八重）桜であった。

右

僧顕昭

二〇あちらこちらに色美しく咲く桜は、春ごとに人の心に懸かる白雲とも言えようか。

この左右の花の白雲の歌は、いずれもきれいに詠まれていると見えるが、その上で言うと、左の歌は八重桜を詠んでいるのなら、その花の雲（まで）が八重に見えるということは、いかがであろう。また雲が八重に重なるといったことは、山などで姿が遠く見える時の様子などが、ふさわしいものとして受け取られるであろう。しかし、八重桜という側面の内容について見ると、巧みで面白くも思われるが、一方、「なり」の字が二箇所に（重なって）あるようです。右の歌は、その姿などが今少し優美には見えるが、近いころにもこういうことを詠んだ歌を見たとように思いますけれど、確かでない。歌の姿は左右ともに面白いので、また持と判定しようと思う。

【注】○資隆 藤原氏で、本名は季隆。豊前守重兼の子。歌林苑会衆の一人。生没年未詳。○顕昭 実父母は不明だが、藤原顕輔の猶子となり、六条藤家の歌人として活躍した。『袖中抄』その他、歌学書類の著作も多い。一一三〇年ころ生まれ、一二〇九年以後没か。○をちこち あちらこちら。○きよげに 「きよげなり」は、端正あるいは純粹な美を表す評語として用いられた。天徳四年『内裏歌合』十九番判詞には「左のうたは、ことばきよげなりとて、以て左為し勝」の用例が見え、『新撰髓脳』には「凡そ歌は心ふかく、姿きよげに、心にかしき所あるを、すぐれたりといふべし」の用例がある。○かたつかた 二つで一組になっている物事の、一つの方。片方。

【考察】左右ともに花を「白雲」としてとらえたところが見られるが、左の歌は、白雲が八重に重なっていると見えたのは奈良の都に咲く桜であった、と詠む。これは、

いにしへの奈良のみやこの八重ざくらけふ九重にほひぬるかな

〔金葉集〕三奏本五八、〔詞花集〕二一九、伊勢大輔

を本歌として、奈良の都の八重桜を、白雲の八重に重なることに結びつけた作と思われる。

右の歌は、あちらこちらに咲く桜の花を「春ごとに人の心にかかる白雲」と詠んでいる。これも花を白雲としてとらえた歌であるが、春は花が人の心に「かかる」のを、白雲が「かかる」のに結びつけたところがあ

る。俊成の判詞は、まず左右の花の白雲の歌がいずれも「きよげに見ゆる」と評している。これは二首ともに全体として整った単純な形で歌われ、そのためすつきりと感じられるような点に注目して評価したものであろうか。

その上で左歌に対しては、「白雲の八重かさなりて見えつる」をとり上げて、八重桜でも桜の遠望が八重の雲と見えるかどうか、また雲が八重に重なって見えるのは山の遠景の場合などがふさわしかろうと批判した上で、しかし八重桜という題材を八重の雲として生かした趣向は巧みで面白いとも評価している。なお、左歌に「なり」が二つあるのを歌病の観点から批判を加えているのは、花六番や九番の判詞の場合と同様である。

右歌に対しては、歌の姿などが「今すこし優」に見える点を評価しながらも、近いころに同様の先行作があったように思われることを言い添えている。この点は「たしかならず」と明言を避けているが、ここで先行作と考えられる歌は、あるいは「久安百首」に見える俊成の歌、

山ざくら咲くより空にあくがる人の心やみねのしら雲（八〇九）

ではなかったか。もしそうであれば、俊成が明言を避けたのは、どう

いうわけであろう。明言するほどの確信はなかったということであろうか。やはり正面から批判するのをはばかったと見るべきであろうか。判定としては、左右ともに「歌さま」が「をかし」として持として

十一番 左

中宮前大進頼保

二いそぎてや花のあたりを過ぎなましちるまであらば物もこそおも

へ

右勝

寂念為業入道

三世をすつる心ならずはさくら花あかでやけふの日をくらさまし

左歌、花のちらぬさきにすぎなんといへる、これも花を思ふゆゑのことばと見ゆれど、つねのならひは、はるかなる山ぢ、うとき人の宿をも、花あればたづねいるこそつねのことなるを、こまをもよほし、むちをあげてすぎなんこと、あまりにかしこくやあらん。右歌、おなじく華のもとにはとまらぬうたなれど、恩をすてて無為にいるころにあらずはといへる、さることときこえたり。心ならずはさくら花などいへる。すがたもいひしりてきこゆれば、以^レ右為^レ勝。

【通釈】

十一番 左

中宮前大進頼保

二急いで花の（咲く）あたりを通り過ぎてしまおうか、——散るまでそこにいれば、物思いをすることになりかねない。

右勝

寂念為業入道

三もし（私が）世を捨てる心でないならば、桜の花を飽かず眺めて、今日の一日を暮らすことであろうか。

左の歌で、花の散らない前を通り過ぎてしまおうと詠んでいるのは、これも花を思うからこそ詠んだと分かるけれども、普通の習わしとしては、遠い山路でも、縁の薄い人の家でも、花があれば尋ねて行くのが通例であるのに、馬を急がせ、鞭を

あげ（走らせ）て通り過ぎてしまふようなことは、余りに常軌を逸したものであろうかと思う。右の歌は、（左の歌と）同様に花の下にはとどまらないことを詠んだ歌であるけれど、人としての情愛を捨てて仏門に入る身でないならば（花を飽かず眺めましょう）と詠んでいるのは、もつともなことで受け取られる。「心ならずはさくら花」などと詠んでいる、その歌の姿も詠み方を心得ていると思われるので、右の歌を勝とする。

【注】○頼保 藤原頼保。顕季の子の参議家保の子。生没年未詳。○寂念 俗名は藤原ひななり為業。丹後守為忠の子。弟に寂超（為経）、寂然（頼業）があり、二弟と共に大原三寂と呼ばれた。生没年未詳。○恩をすて 人の情けを捨てて。「恩」はここでは出家者の断つべき煩惱の源としての情愛。○無為にいる 仏門に入る。出家する。「無為」は仏語としては「有為」（恒常でないこと）に対し、生滅変化しない絶対の真実について言われる。

【考察】左右ともに花のあたりに長くともまらぬ心が詠まれているが、左の歌の場合は、花が散るのを見ると心がいたむから、それを避けて早く通り過ぎようという気持ちである。

右の歌は、自分でもし世を捨てる心をもたない身であれば、花を飽かず眺めて暮らすことであろうかと詠む。出家者として花に執着しない気持ちで率直に詠んでいる。

俊成の判詞は、左歌が、花の散らない前に花の下を離れようと詠んだのを、花にひかれる心に基づくことは分かるが、花の歌は花を強く求め尋ねる心を詠む通例とは異なり過ぎると批判している。いわゆる花の本意に背く点を問題にしたものであろう。

右の歌は、左歌と同様とも見えるが、特に出家者の心として花に執着しないと詠んだ点に俊成は注目して、「さることときこえたり」と肯定している。花の歌は花の本意を重んじるのが伝統的な観点でも、出家を大事と見、出家者の心の表出を一層重視したのであろう。また「心ならずはさくら花」などという表現も歌い方の面で手慣れたもの

を感じさせるとして、右の勝としている。

十二番 左持

西遊範稱入道

二三ささなみやながらの山のみねつづき見せばや人に花のすがたを

右

生西為真人道

二四風ふけばみふねのやまのさくら花しらなみかくる心地こそすれ

左、ことばつづきいひしりて、やすらかにきこゆ。右は、みふねのやま、しらなみかくるなどいへる、たくみには見ゆるを、しらなみかくるほどぞ、いかにぞやきこゆれど、歌のさま、持とみえたり。

【通釈】

十一番 左持

西遊範稱入道

二三長等の山の、続く峰々、そこに咲く花の様子を人に見せたいものだ。

右

生西為真人道

二四風が吹くと、三船の山の桜の花は、白波が打ち寄せるように見える。

左の歌は、言葉の続け方を心得た風で、安らかに詠まれたと感じられる。右の歌は、「三船の山」に応じて「白波掛くる」などと詠んでいるのが、巧みなことと思われるが、ここで（山桜について）白波が打ち寄せる様子としたのは、いかがであろうかという気もする。しかし歌の姿としては、持と思われる。

【注】

○西遊 俗名は藤原範綱。本名雅清。散位従五位下永雅の子。永万元年（一一六五）ごろ出家。生没年未詳。○ささなみや 枕詞で、

ここでは「長等」にかかる。「ささなみ」は、もと琵琶湖の南西岸地方を言い、そこと関連のある地名にかかる枕詞に用いられた。『万葉集』では「ささなみ（左佐浪）」で、鎌倉時代以降は「ささなみ」か。この歌の詠まれた当時の音がいづれかは明らかでない。○ながらの山 長等の山。今の滋賀県大津市、三井寺の背後の山。○生西 俗名は

藤原為真。為実とも。信濃守永実の子。生没年未詳。○みふねのやま 三船の山。大和の国の歌枕。今の奈良県吉野郡吉野町、宮滝の南方の山。○いかにぞや どういうものか。感心しない気持ちで言う。

【考察】左右ともに歌枕の山の桜をとり上げた作であるが、左の歌は、長等の山の峰続きに咲く花の様子を人に見せたいとの心を平明に詠んでいる。右の歌は、三船の山の花に風が吹くと白波が打ち寄せるように見えると詠んでおり、これは山の名の「み船」によって「白波かくる」を縁語にしている。

俊成の判詞は、左歌に対しては、言葉続きを心得た詠み方で、「やすらかにきこゆ」と評している。平明で穏やかな表現を、それなりに評価したと見られる。右歌に対しては、縁語の技巧を用いた点を「たくみに」見えると評価する一方で、風に吹かれる山桜の様子を「白波かくる」と形容したのを問題にしている。縁語の面白さが作意の中心になっているとも見える点を批判したところがあるうか。

【備考】十二番左歌は『千載集』（七五）に、第五句「花のさかりを」の形で収められている。

十三番 左持

前石見介祝部成仲朝臣

二五あかなくにはなのあたりに旅ねしつ月だにあれやちるまでも見ん

右

片岡禰宜賀茂政平朝臣

二六身にかへてはなをちらさぬ世なりせばをしまぬ人やあやな見るべき

左歌のすがたことばづかひ、をかしくきこゆるを、月なく、くらきよの花をしも、などかとぞおほゆる。右はこころありてはみゆるを、いづこにかと、ことばたらぬ所ある心やすらん。左ははるの夜のやみをあやなくきこゆれど、歌のすがたをか。右はいかにぞやいひおほせられぬところあれど、花をおもへる心ふかし。又、持と申すべし。

【通釈】

十三番 左持

前石見介祝部成伸朝臣

二五(花を)見飽きないのに日が暮れて、花のあたりに旅寝をした。
せめて月なりと出てくれ、花の散るまで見ようと思う。

右

片岡彌宜賀茂政平朝臣

二六わが身に換えて、花を散らさない世であつたとすれば、散るのを
惜しまぬ人が、不都合にも花を見ることにならうか。

左の歌の姿ないし言葉遣いは、面白く受け取られるが、月がな
く暗い夜の花を、どうして見ようと旅寝したのだからかと思わ
れる。右の歌は思い入れて詠まれているとは見えるが、どこや
ら言葉が足りないところがあると感じられるだろう。左の歌は
(躬恒の歌ではないが)春の夜のやみ(の花見)について筋が通
らないと思われるけれど、歌の姿が面白い。右の歌はなぜか十
分に言い尽くしていない点が感じられるけれど、花に対して思
い入れている心が深い。これも持と判定しよう。

【注】

○祝部成伸 日吉社禰宜成実の子。歌林苑会衆の一人。一〇九

九一一一九一。○あかなくに 見飽きないのに。「なくに」は、打消

の助動詞「ず」のク語法に助詞「に」が添った形。○賀茂政平 神主

成平の子。歌林苑会衆の一人。生年未詳、一一七六年没。○あやな

筋が通らない意の形容詞「あやなし」の語幹。感動表現に用いた。

【考察】左の歌は、花を見飽きず花のあたりに旅寝をしたが、せめて

月が出てくれ、そして散るまで見よう、と詠む。

右の歌は、身に換えて花を散らさない世であつたら、散るのを惜し

まぬ人が、不都合にも花を見ることにならうか、と詠む。

俊成の判詞は、その前半と後半と同様の趣旨を繰り返しているが、
左右の歌のそれぞれに一長一短を認めている。すなわち、左の歌は姿
などは「をかし」と思われるが、心に「あやなく」——筋が通らない
と見えるところがあり、右の歌は「心あり」ないし「心ふかし」と見
えるが、「言葉たらぬ」あるいは「言ひおほせられぬ」ところがある
として、持と判定している。

十四番 左

阿闍梨心覚

二七よし野山はなのさかりを見わたせばただはるの日にきえぬ白雪

右勝

僧俊恵

二八よし野の花さきぬらしこぞもさぞみねにはかけしやへのしら雲
左の歌、つねのことながら、さしてそのふることとはおぼえぬ
にや。歌合の歌と見えたり。しもの句のただの字ぞ、いますこ
しおもふべしやときこゆる。右歌、すがたことばいとをかし
見ゆる。ただし、みよし野の花さきぬらしといへるほどぞ、山
あらまほしくやときこゆる。又、かみしもの句のはじめに、み
よし野の、みねには、とおけるやいか。されど、かやうのと
が毛をふくきずなるべし。なほ、みねにはかけしやへのしら
雲といへる、すがたいとをかし見ゆ。仍以^(まはらぬ)右為^(まはらぬ)勝^(まはらぬ)畢。

【通釈】

十四番 左

阿闍梨心覚

二七よし野山の花盛りの様子を見渡すと、まさしく春の日に消えない

白雪と見える。

右勝

僧俊恵

二八吉野の花が咲いたらしい、——去年も(花の時)あのように、

峰には白雪を幾重も懸けたと見えた。

左の歌は、ありふれた歌詞であるが、特にある古歌の言葉を用
いた作とは見られないと思う。歌合の歌と言うべき(格調のあ
る)作と見られる。もつとも、下の句の「ただ」の語は、今少
し考えるのがよいかと思われる。右の歌は、姿や言葉が大層面
白く見える。ただし、「み吉野の花さきぬらし」と詠んでいる
あたりは、「山」の語がありがたいように思われる。また、上の
句と下の句の初めに、「み吉野の」「みねには」と「み」を重
ねて)詠んでいるのは、いかがであろうか。しかし、このよう
な過ちを指摘するのは、毛を吹いて傷を求める類のことに属す

るであろう。やはり、「峰にはかけし八重の白雲」と詠んでいるのは、その姿が大層面白いと見える。そこで右の歌を勝と判定した。

【注】○心覚 兵部少輔源信綱(源俊頼の甥)の子。比叡山の阿闍梨。生没年未詳。○俊恵 源俊頼の子。東大寺の僧となる。白川の自坊歌林苑を歌人たちの党派を超えた交流の場とした。一一三一一一九五以前没。○つねのこと 常の言。普通の言葉。ありふれた歌詞。俊成は嘉応二年の『住吉社歌合』判詞にも、「あけてをたたむ二村の山といへる、をかしくはきこゆれど、かの兼輔卿の歌に、二見の浦はあけてこそ見めといへるより、つねのことにぞなりにたる」(旅宿時雨一番)などと用いている。○歌合の歌 四番「注」参照。○毛をふくき 強いて指摘する弱点。「毛を吹いてきずを求む」(毛を吹き分けて傷を探し出す意)の成語による。○畢 をはんぬ。「終りぬ」の変化した語。動詞の連用形に付けて用いた場合、その動作の完了したことを表す。

【考察】左右ともに吉野山の花を詠んだ作であるが、左の歌はその花盛りの様子を白雪に見立て、右の歌は同じく花の咲いた様子を白雲としてとらえている。吉野山の花の遠景を雪や雲に結びつけて詠んだ先行歌は、例えば、

吉野山きえせぬ雪と見えつるは峰つづきさく桜なりけり(『拾遺集』四一、よみ人しらす)

吉野山八重たつ峰の白雲にかさねてみゆる花桜かな(『後拾遺集』二二一、清家)

などがある。そして、これらの歌に用いられた「きえせぬ雪」や「八重たつ峰の白雲」の語句も、それぞれ左右の歌に通じるところがある。ただし、左右の歌はいずれも先行歌を模倣したというような作ではないであろう。

俊成の判詞は、左歌については、特長を「歌合の歌」と見える点に認めている。これは特に一首のおおらかな格調に注目したものである

うか。一方問題点として、下の句の「ただ」の語を挙げている。これは左歌でこの語が特に必要と思われず、有効に用いられていると見えない点で、その安易な用い方を問題にしたものかと思う。

右歌については、「姿ことばいとをかく見ゆる」と評価する。ただし問題点として、一つには「み吉野の花さきぬらし」あたりに「山」の語がほしい点、また一つには上下の句の初めに「み」の文字が重なっている点を挙げる。後の点は、歌病に言う文字病の観点によつたものである。しかし俊成はこの二つの問題点を一応挙げたものの、これは毛を吹いて傷を求める類の批判であるとす。そして特に咲き満ちた山桜の遠望を「峰にはかけし八重の白雲」と詠んだのを、「姿いとをかく見ゆ」と評価し、右の勝と判定している。

郭公

一番 左勝

権中納言実国

二九なごりなく過ぎぬなるかな郭公こそかたらひし宿としらすや

右

小侍従

三〇たづねつるころのほどやみえぬらんかへればおくるほととぎすかな

左歌、ききなれたる心ちこそすれど、すゑの句いとをかし。右の歌も、かへればおくるなどいへる、すがたはいとをかく見ゆるを、ほととぎすにおくられむほどや、ききすてかへりけるにやとおほゆらん。猶、左の、こそかたらひし宿としらすやといへる、すがたいとをかし。左可レ為レ勝。

【通釈】

郭公

一番 左勝

権中納言実国

二九心残りもなく飛び去つたようだ、ほととぎすよ、ここは去年親しんだ家と気がつかないのか。

右

小侍従

三〇尋ねて来た心の深さが分かったのだろうか、帰りかかると（わたしを）送るように、ほととぎすの音がする。

左の歌は、（この種の歌を）聞き慣れた気はするけれど、下の句が大層面白い。右の歌も、「帰れば送る」などと詠んでいる、その姿は大層面白く見えるが、ほととぎすの声に送られた際に、聞き捨てて帰ったのかと思われそうである。やはり、左の歌の、「こそ語らひし宿と知らずや」と詠んでいる、その姿が甚だ面白い。左を勝と判定しよう。

【注】（歌の作者は「花」の題の場合と同じであるから、以下作者の注を省く。）〇こそかたらひし宿 去年ホトトギスが親しんだ家。「語らふ」は、「語る」の未然形に反復や継続を表す助動詞「ふ」が添ったのが本来の形であるが、親しく接する意味に用いられ、また特にホトトギスが鳴く場合について用いられた。

【考察】左の歌は、郭公のすげなく飛び去ったのを恨む心を、郭公に呼び掛ける形で詠んでいる。これと似たところのある先行歌に、赤染衛門の、

夜もすがら待ちつるものをほととぎすまたども（賀陽院水田歌合）

かな（『後拾遺集』一九四）

の作があり、「過ぎぬなるかな」の句が用いられている点などから見て、この赤染衛門の作の影響を左歌は受けているかもしれない。しかし左歌が「こそ語らひし宿と知らずや」などと呼び掛け、郭公につれない恋人のイメージを重ねるような詠み方をした点は、この歌の特色とすべき趣向であろう。

右の歌も、郭公を擬人的にとらえたところが見られるが、これは、自分が郭公を尋ねて来た思いの深さが通じたのか、帰ろうとすると見送るように郭公が鳴くと詠んでいる。

俊成の判詞は、左歌については、「聞きなれたる心ち」がするが、下句に「こそ語らひし宿と知らずや」と郭公に呼び掛けているのを取り上げて「いとをかし」と評している。これはやはり郭公に恋人のイ

メージを重ねた詠み方をした点を評価したものかと思う。

右歌について、「かへればおくる」などと詠んだのを取り上げて、「姿はいとをかしに見ゆる」と評したのも、左歌の場合と同様の観点で評価したのであろう。しかし、この詠み方では、その送ってくれる郭公の声を聞き捨てて帰ったように受け取られるのを、問題点として挙げている。題の郭公に対する思い入れの深さが損なわれる虞があると見ての批判であろう。

俊成は左歌を勝と判定し、『千載集』にも選んでいるから、相応の価値を認めたのであろう。

【備考】一番左歌は『千載集』（一六二）に収められている。

二番

左勝

別当隆季

三二いかなればなをよばふ郭公いねがてにのみよただなくらん

右

三河

三三としをへてききふるせども郭公なくたびごとにもめづらしきかな

此左右の歌、左はむかしのことばにして心めづらしく、右はち

かきすがたながら事ふりてきこゆれば、以て左為勝。

【通釈】

二番

左勝

別当隆季

三二どんなわけがあつて、お前の名を名乗って鳴くほととぎすは、夜

寝られずに悲しい声を振り絞っているのだろうか。

右

三河

三三長年にわたつて（声を）聞き古したけれど、ほととぎすは、その

鳴くたびごとに新しく心を打たれることだ。

この左右の歌は（対照的で）、左の歌は古歌の言葉を用いているが、心が目新しく、右の歌は近ごろの歌い様であるが、詠み古された内容と思われるので、左の歌を勝とする。

【注】〇ながなをよばふ郭公 汝が名を呼ばふ郭公。お前（自身）の名を呼び続けるホトトギス。ホトトギスの鳴く声を、ホトトギスが自

分の名を名乗っているとらえた。こういうとらえ方の古い例は、『万葉集』の「あかときに名のり鳴くなるほととぎすいやめづらしく思ほゆるかも」(四一〇八、大伴家持)などが考えられる。〇いねがて寝るのが難しいこと。本来は、寝る意の動詞「いぬ」の連用形に、できる意の補助動詞「かつ」が添った「いねかつ」の活用形と見られる。「いねがて」が打消の助動詞を伴って使われたのが元で、「古にありけむ人も吾がごとか妹に恋ひつづいねがてずけむ」(『万葉集』五〇〇、柿本人麻呂)のように用いられた。しかし、平安時代になると、その「いねがて」が「いねがて」と濁音化し、「がて」に「難し」の意のある語として誤用され、「あしひきの山郭公わがごとや君に恋ひつづいねがてにする」(『古今集』四九九、よみ人しらず)のように用いられた。〇よただなくらん 夜にひたすら鳴いているのであろう。この語句を用いた先行歌に、『古今集』の「わがごとく物やかなしき郭公時ぞともなくよただなくらん」(五七八、藤原敏行)がある。「なく」は「鳴く」であるが「泣く」を掛けたと見られる。

【考察】左の歌は、郭公がみずから名乗って鳴くが、夜寝られずに鳴くのはどんなわけがあるのだろうかと言んでいる。下旬の「いねがてに」「夜ただなくらん」などの語句は、「注」に挙げた『古今集』の歌(四九九、五七八)に見えるものである。そして、『古今集』でこれらの歌は恋の部に収められており、郭公に恋の切ない思いを投影した歌と見られるところから、左歌も同様の心をもつと見るのが自然であろう。すると左歌は、夜に名乗り続ける郭公にはどんな切ない思いがあつて寝もせず悲しい声で鳴いているのだろうか、と思いやつた趣の作と思われる。

右の歌は、郭公の声は長年聞き古したけれども鳴くたびに新鮮に感じられる、と詠む。これは素直に詠まれてはいるが、とりたてた特長に乏しい作ではなからうか。

俊成の判詞は、左右の歌の新しさ古さを、詞・姿と心との二方面について対照的に挙げている。左の歌は、「昔の詞」を用いているが「心

めづらしく」思われるのに対して、右の歌は「近き姿」をとっているが「事ふりてきこゆ」と詠み古された心である点を批判し、左の勝と判定している。

三番 左勝

三三夕づくよいるさの山の木がくれにほのかにもなくほととぎすかな

右

弁

三四ほととぎすなく一声のあかなくにすぐる雲路の関とならばや

左歌、すがたことばいとをかしこそ見えはんべれ。右歌、すぐる雲路のなどいへる、すがたをかく見ゆるに、せきとならばやといへるほど、すこしにはかなる心地ぞする。また、ありがたきことともおほゆれば、左の、いるさの山の木がくれは、なほをかくしおもうたまへられて、左をかちと申すべし。

【通釈】

三番 左勝

宰相中将宗家

三三夕月(いさよ)の入る、入佐山(いささ)の木の間に隠れに、ほのかな声で鳴くほととぎすよ。

右

弁

三四ほととぎすは、鳴く一声が聞き飽きないのに、飛び去つたが、その通つていく雲路の関になりたいと思う。

左の歌は、姿、言葉が大層面白い作と見受けまます。右の歌は、「過ぐる雲路の」などと詠んだのは、姿が面白いと見えますが、「関とならばや」と詠んだあたりは、少々唐突な感じがする。それに(雲路の関となるなど)、実際にありそうにもないこととも思われるので、左の「入佐の山の木がくれ」の歌は、やはり一層面白いと思われまして、左の歌を勝と判定しようと思ひます。

【注】〇夕づくよいるさの山 夕月の入る入佐の山。「夕月夜」は、夕方に空に出ている月。「入佐の山」は「八雲御抄」によれば但馬の國の歌枕。「夕月夜入佐の山」と続けた先例に、元永元年十月二日「内

大臣家歌合』時雨十番右歌「夕月夜入佐の山の高ねよりはるかにめぐ
る初しぐれかな」(二一〇、兼昌)があるが、その場合は「夕月夜」は
枕詞として用いられていると見られる。○ほのかにもなく「ほのか
になのる」と『千載集』の多くの本に見える。これは撰者俊成の改め
た形ではないかと上条彰次氏校注『千載和歌集』では推測される。い
ずれにもせよ「ほのかに」はこの場合ホトトギスの声に關して言われ
ているが、上句に詠まれた入りかかる夕月のほのかさに対応している。
○あかなくに 飽きたりないのに。「すぐる」に掛かる。○雲路の関
「雲路」は、ここではホトトギスが飛ぶ時の雲の中の道。「関」は
その道の途中でホトトギスを止めるものとして言う。○ありがたきこ
とも ありそうにもないこととも。『新編国歌大観』では「ありが
たきことども」と読まれているのを改めた。

【考察】左の歌は、夕月が入佐山に入りかかる景の視覚的なほのかさ
から、木の間隠れに鳴くほととぎすの声の聴覚的なほのかさへと詠み
進めた点に、特長をもつ作であろう。

右の歌は、ほととぎすが一声残して飛び去ったのを飽かず思いう心か
ら、その行く手の「雲路」の「関」となって引き止めたいと詠む。こ
れはそういう趣向に特色のある作であろう。

俊成の判詞は、左歌については「姿詞いとをかしく」見えると評価
する。右歌については「姿をかしく」見えると評価するところもある
が、ほととぎすの行く手の雲路の「関とならばや」と詠んだ点を、唐
突な感じもあり、不自然にも思われると批判し、左歌の勝とする。な
お俊成は左歌を『千載集』にも選んでいるから、かなり高く評価した
と思われる。

【備考】三番左歌は『千載集』(一六三)に収められている。

四番

左持

右大弁雅頼

三五郭公なかであけ行くなつの夜はまたれぬこゑをたてつべきかな

右

右京大夫

三六まちかねてまどろむほどに時鳥ゆめのもりにていまぞなくなる

左、めづらしきさまには見ゆるを、またれぬこゑとはいかなる
こゑにかあらむ。もし秦女郢客のたぐひならば、あけがたのこ
ゑもをかしくやあらむ。さらずは輕輕にもや。右、まどろむほ
どに、ゆめのもりにてなんどいへる。をかしくはきこゆるを、
この夢のもりこそききなれてもおもうたまへられぬ。もし証歌
あらば勝ち侍りなん。当時はおほつかなければ、管見の判者、
暫しばしば持と可申。

【通釈】

四番

左持

右大弁雅頼

三五ほととぎすが(鳴く声を夜通し待ったが)、鳴かずに明けていく夏
の夜は、待たれなかつた声を立てそうになる。

右

右京大夫

三六ほととぎすが鳴くのを(待ったが)待ちかねて、まどろんでいる
と、夢の森で今、鳴いているようだ。

左の歌は、目新しい様子には見えるが、「待たれぬ声」とはどう
いう声なのであろうか。もしも歌謡を歌う人の歌声の類であら
ば、明け方の声も面白いことであらうか。(しかし) そうでなけ
れば、軽薄にも聞こえるかと思う。右の歌は、「まどろむほどに」、
「夢の森にて」などと詠んでいるのは、面白くは聞こえるが、こ
の「夢の森」という言葉は聞き慣れたものとも思われません。
もしこの言葉を用いた証歌があれば右歌の勝と言えるでしょう。
ただ今のところは、その点が確かでないので、知識の乏しい判
者として、当面持と申しておこうと思います。

【注】○秦女郢客 このままの形の熟語の用例は見いだし難いが、「秦
声」(秦国の俗謡)「郢曲」(楚国の都の郢の俗謡)等の語に基づいて、
歌謡を歌う人の意に用いたものか。特に「郢曲」は平安・鎌倉時代に
歌謡を言う言葉として広く使われた。そして平安後期には流行歌謡の
歌い手に遊女・くぐつ女等が多かつたので、「女」を加えたものでは

なからうか。少し後の用例になるが『明月記』建仁二年二月十五日の条には「申時如例遊女野曲等了。早出不レ知二其後事」とある。『平安朝歌合大成』では、「秦女郢客とは遊女嫖客の意で、特に蕭史弄玉の故事と関係はあるまいと、原三七教授の御示教を得た」と注せられる。しかし「明け方の声をかしくやあらむ」と言われる点から、歌謡を歌う人の意を中心に考えたい。○証歌 歌の表現の先例や典拠となる古歌。主に三代集や『万葉集』あたりの範囲で考えられた。

【考察】二首はともに夜郭公を待ったが声が聞けなかった場合の歌であるが、左の歌は「待たれぬ声をたてつべきかな」と詠み、右の歌は「夢の森にて今ぞ鳴くなる」と詠む。いずれも類例の少ない表現をもつ下句である。

俊成の判詞は、左歌については、「めづらしきさま」と評した上で、「待たれぬ声」とは何を言ったものかと問題点を指摘する。そして普通に受け取れば「軽々に」に思われようと批判している。

右歌については、「まどろむほどに」「夢の森にて」などと詠んだ点を「をかしく」思われると評価するが、「夢の森」という表現を問題視し、そう詠んだ証歌があれば勝とすべき歌であろうと言っている。ここには俊成の伝統的な表現を重視する保守的な姿勢が見られる。

五番 左勝

重家朝臣

三七五月雨にしをれつつなく郭公ぬれいろにこそこゑはきこゆれ

右

頼政

三八ほととぎすききてもいとどくるしきはあかでなほまつところなりけり

左の歌、しをれつつなくなどいへるほど、をかしくきこゆるを、こゑはいかにぬれ色なるらむとぞおほゆれど、もののいろをほむるとき、ぬれいろなりなどいふなるべし。又、こは色などいふこともあれば、などかさもなからん。右歌はこころありて見

ゆるを、高陽院の歌合にや、ききてしもなほぞまたるほととぎすなく一声に「高陽院七番歌合」一声のあかぬ心は、といへる歌思ひいでられて、ききなれたるこちすれば、左の勝にやとぞ。

【通釈】

五番 左勝

重家朝臣

三七五月雨にぬれながら鳴くほととぎすは、ぬれ色に、その声が聞こえる。

右

頼政

三八ほととぎすの声を聞いても、一層思い悩むのは、聞き飽きないで、なおその声待つ心なのだ。

左の歌は、「しをれつつ鳴く」などと詠んだあたりが、面白く思われるが、その声はどうして「ぬれ色」なのだろうかと疑問も感じられる。けれども、ものの美しい様子を褒める時に、「ぬれ色」だなどと言うのであろう。また、「声の様子について」「声色」などと言うこともあるから、この（声を「ぬれ色」ととらえた）表現を否定するわけにはいかない。右の歌は思い入れの深い歌と見えるが、高陽院の歌合であったか、「聞きてしもなほぞ待たるほととぎす鳴く一声のあかぬ心は」と詠んだ歌が思い出されて、聞き慣れた気がするから、左の勝であろうかと思う。

【注】○ぬれいろ ぬれた色の意味から転じて、つややかな色も表したのであろう。また「色」は、色彩に限らず、人に何かを感じさせる様子を言うのにも用いられた。ここでは、つややかな声の様子について言った。○こは色 声色。声の様子、調子。○などかさもなからん どうして、そうでないのがよい訳があるうか。ここでは、声について「ぬれ色」と表現しないのがよいとは言えない、との意であろう。

○高陽院の歌合 高陽院七番歌合。寛治八年（一〇九四）、前関白藤原実家が自邸の高陽院で催した歌合。五題で、各題七番、全体で三十五番。歌人は左方が女七人、右方が男七人。判者は源経信。○ききてしもなほぞまたるほととぎす…… 下句「なくひとこゑにあかぬ心

は」の形で、『高陽院七番歌合』郭公五番に見える紀伊の歌。歌合の判定は勝で、後に『新勅撰集』(二四六)にも収められた。

【考察】左の歌は、五月雨にぬれて鳴く郭公を歌っているが、その声
が「ぬれ色に」聞こえたと詠んだ点に特徴のある一首であろう。右の
歌は、郭公の声を聞いても「いとど苦しき」思いがすると上句に言い、
その理由を下句に、郭公の声聞き飽きず一層待つ気持ちがつるた
めだ、と明かす形で詠んでいる。

俊成の判詞は、左歌については、「しをれつつなく」と詠んだあた
りを「をかしくきこゆる」と評価するが、郭公の声を「ぬれ色」とと
らえた点を問題点として挙げ、しかし結局これは非難すべきものでは
いと言う。この「ぬれ色」に関する意見の述べ方は、やや回りくどい
ようにも見えるが、前番の判詞で「待たれぬ声」や「夢の森」などの
表現を問題にした俊成としては、「ぬれ色」についても同様の態度を
示す必要があったとも推測される。特に歌合の主催者の重家の歌だけ
に、これを特別扱いにしたという印象は避けたいと配慮したかもしれ
ない。

右歌については、「心ありて見ゆる」と評価するが、同様の発想の
歌が『高陽院七番歌合』に見える点から、対する左の歌を勝とする。

六番 左持

経盛朝臣

三九ほととぎすなくねはとしにかはらねどいやめづらしきこちこそ
すれ

右

師光

四〇あしびきのやまよりいづる郭公はつねふるさで我が宿になけ

此左右の郭公、左の、なくねはとしにといへるすがた、右の、
はつねふるさでなどよめる心、いづれもいひなれてきこゆれば、
持と可レ申。

【通釈】

六番 左持

経盛朝臣

三九ほととぎすは、鳴く声は毎年変わらないのだが、聞くたびに一段
と新鮮な気がする。

右

師光

四〇山から出てくるほととぎすよ、初音を鳴き古さないで、わたしの
家のあたりで鳴いてくれ。

この左右のほととぎすの歌は、左の歌の「鳴く音は年に」と詠
んだ姿、右の歌の「初音古さで」などと詠んだ心、そのいずれ
も習熟した詠み方と思われるので、持と判定しましょう。

【注】〇としに 毎年。〇やまよりいづる郭公 山から里に出るホ
トトギス。ホトトギスは山から来て山へ帰る鳥と考えられた。〇はつ
ねふるさで 初音(はつね)鳥が、その年、その季節に初めて鳴く声)を鳴き
古さないで。

【考察】左の歌は、郭公の声は毎年変わらないが、聞くたびに新鮮に
感じられると詠む。右の歌は、山から里に出る郭公に、その新鮮な初
音を我が家のあたりに響かせてくれと呼び掛けている。二首とも特に
目立った趣向などは用いず、郭公の新鮮な声に引かれる心が素直に表
現された歌であろう。

俊成の判詞は、左の「鳴く音は年に」、右の「初音古さで」等の表
現を挙げて、いづれも「言ひ慣れてきこゆ」と評し、持としている。

七番 左

公重朝臣

四一こころあらばわれにちがはほととぎすたづぬるかたの山路にを
なけ

右勝

頼輔朝臣

四二ほととぎすまはおろかに思ひけりたづぬるをりぞ声もしまぬ
左、をかしきさまには見ゆるを、われにちがはでといへるほど、
かならずちがふべきことにやはときこゆ。すゑの句もこころた
らぬ心ちやすらむ。右、すゑの、こゑもをしまぬやあまりなら
んとおほゆれど、まはおろかにおもひけりなどいへるわたり、

よろしくきこゆるうへに、左はなげとばかりいへる歌なり。右はよくきけることばなれば、右勝と見えたり。

【通釈】

七番 左

公重朝臣

四一ほととぎすよ、思いやりの心があれば、わたしと行き違わないで、お前をたずねて行く方角の山路で鳴いておくれ。

右勝

頼輔朝臣

四二ほととぎすは、そのおとずれを待つのでは、おろそかに思うのだ。こちらからたずねて行く時は、声を惜しまず鳴いてくれる。

左の歌は、面白い歌い様には見えるが、「我に違はで」（わたしと行き違わずに）と詠んだあたりは、必ず行き違はずのものではあるまいという気がする。下の句も心が不十分と見える点があるか。右の歌は、下の句の「声も惜しまぬ」というのは、度を越えて（強調して）いると思われるけれども、「待つはおろかに思ひけり」などと詠んだあたりは、わるくはないと思われる。その上、左の歌は（ほととぎすの声を聞いた歌ではなくて）ほととぎすに「鳴け」と言っただけの歌である。（それに比べると）右の歌はほととぎすの声を十分に聞いた歌であるから、右の勝と考えられる。

【注】○われにちがはで わたしと行き違わないで。ここで「われにちが」うというのは、自分が山へ行くのと別の経路でホトトギスが山から里へ出て、出会わないことを言うのであろう。○おろかに おろそかに。

【考察】二首はともに郭公を尋ねることに関する歌であるが、左の歌は郭公に呼び掛ける形で、自分が尋ねて行くのと行き違うことをせず、自分の行く方角の山路で鳴いてくれ、と求めている。

右の歌は、郭公がその声を聞こうとする人の積極性に応じて態度を変えるという発想で、郭公は人が待つだけではおろそかに思うのだ、人が尋ねて行くと精一杯鳴いてくれる、と詠む。

俊成の判詞は、左の歌については、一応「をかしきさま」に見えると評価するが、二句および下句の表す内容を問題視して批判している。下句「たづぬる方の山路にを鳴け」を「心足らぬ心地やすらむ」と批判したのは、自己を中心に郭公の動きを指図した点を、未熟な心境と見たのであろうか。

右の歌については、郭公が「声も惜しまぬ」と詠んだ点は「あまりならん」と言って、過度の強調と批判するが、「待つはおろかに思ひけり」と詠んだ点は「よろしくきこゆる」と評価している。

その上で左右の歌を比較して、左が「鳴けとばかり言へる歌」であるのに対して、右は「よく聞けることば」である点を挙げて、郭公の声を聞いたことを詠んだ右歌の勝と判定している。これは『高陽院七番歌合』郭公三番で、左「夜をかさね待兼山のほととぎす雲のよそにて一声ぞ聞く」、右「明くるまで待兼山のほととぎす今日も聞かでや暮れむとすらむ」の二首に対する経信の判詞に、

左は、ほととぎす聞きたる歌なり。右のは、まだ聞かねば、さきどきも聞きたるをぞ、まさるとは申すめる。

とあるような、歌題の本意の重んじ方に従ったものである。

八番

左勝

通能朝臣

四三ほととぎすかたらふこゑはとまらねど過ぎぬるそらのなつかしきかな

右

有房

四四まちてだになぐさむべきをほととぎすなきいづる夏ぞ夜さへみじかき

左歌、すぎぬるそらのなどいへるわたり、をかしくみゆ。あとなきそらをながめつるかなといへる歌にぞかよひてきこゆれど、さてはあらずやあらん。右歌は、なきいづる夏はといへるほど、ことのほかにたらずきこゆれば、左の勝なるべし。

【通釈】

八番 左勝

通能朝臣

四三ほととぎすの、鳴く声は残らないけれど、その飛び去った空に心を引かれることだ。

右

有房

四四ほととぎすは、待っているだけでも心が慰むはずなのに、その鳴き出す夏は、待つ夜までが短い。

左の歌は、「過ぎぬる空の」などと詠んだあたりが面白く見える。

ただ「ほととぎすあかで過ぎぬる声により」あとなき空をながめつるかな」と詠んだ歌に似通っている感じがするが、その歌そのままではないように思う。右の歌は、「鳴きいづる夏は」と詠んだあたりが、存外に不十分と思われるので、左の勝である。

【注】○まちでだになぐさむべきをほととぎす ほととぎすは、そのおとずれを待っているだけでも、期待で心が慰むはずであるのに、という心であろう。○あとなきそらをながめつるかなといへる歌 「ほととぎすあかで過ぎぬるこゑによりあとなき空をながめつるかな」。

この一首は承暦二年『内裏歌合』七番に、五句「たづねつるかな」の形で、左近中将家忠の作として出ているが、『金葉集』(一一二)には、「承暦二年内裏歌合に人にかはりてよめる」の詞書で、藤原孝善たかよしの作として収められる。○さてはあらずやあらん 言葉に即して直訳すれば、そのままではないのであろうか、ということになるが、この場合具体的には、似ているように見える先行歌をそのまま用いたのではないと思う、という気持ちで言ったものであろう。

【考察】左の歌は、郭公の声は残らないが、その飛び去った空に名残が感じられ心が引かれる、と詠んだものであろう。右の歌は、郭公の鳴くのを期待して待つだけでも心が慰むところがあるが、夏の短夜はその待つ時間までが限られる、と嘆く作意であろう。

俊成の判詞は、左歌で、郭公の「過ぎぬる空の」と詠んだあたりを「をかしく見ゆ」と評価する。ただ問題として、同様の先行歌に孝善

の作があるのを指摘した上で、しかし模倣作とは言えないとする。

右歌については、「鳴きいづる夏ぞ」の句をとり上げ、「ことの外に足らずきこゆ」と批判して、左の勝とする。郭公が「鳴きいづる夏」は夜が短いと言うのは、説明としては丁寧なようであるが、そんな風に露骨に説明するのは、歌心からは遠いものと俊成は思ったのであろう。

九番 左勝

季経朝臣

四五ほととぎすさこそまたなき声ならめただ一たびもなるなるかな

右

隆信

四六ほととぎす雲路にきゆる一こゑはゆくかたをだにえやはながむる

左歌、すがたことばめづらしくはきこゆるを、さこそまたなきとは、いかによまれたるにか。もし無二亦無三なるにやあらん。時鳥はげにさもあることなり。こゑならめ、なるなるかなぞ、おなじじこにやきこゆる。右、すゑの句はよろしく見ゆるを、雲路にきゆるといへるほど、いかにぞやきこゆ。おなじ一声なれど、聞きまよはしてむよりは、たしかになるらんはまさるとなむ。

【通釈】

九番 左勝

季経朝臣

四五ほととぎすは、まことに二つとない声だろうが、ただ一度だけ、(鳴いて)名乗ってゆくことだ。

右

隆信

四六ほととぎすの、雲路に消えてゆく一声は、その飛び去る行方さえ、眺めやることできない。

左の歌は、歌の姿や言葉が目新しく思われるが、「さこそまたなき」とは、どのような意味で詠まれたのであろうか。あるいは経典に言う「無二亦無三」を意味しているのであろうか。(そうであれば)ほととぎすの場合は、まことにもつともなことで

ある。(ただし、「声ならめ」と「名乗るなるかな」は、同様の言葉が重なっているように思われる。右の歌は、下の句はわるくはないと見えるが、「雲路に消ゆる」と言っているあたりは、いかがなものかと思われる。同じほととぎすの一声を題材とした作であるが、(右歌に詠まれた)聞いて心を迷わせるような一声の場合よりも、(左歌に詠まれた)確かに名乗ると見られる一声の場合の方が勝ると思う。

【注】○またなき声 二つとない(優れた)声。○無二亦無三 むにやくむさん。『法華経』方便品に「十方仏土中、唯有二乘法」。無二亦無三と見える。成仏の道はただ一乗の法(一乗は一つの乗り物で、乗り物は衆生を仏の悟りに導く教えの例え)のみで、二乗や三乗にはないことを言う。転じて、ただ一つで、他に類がないことを言うのに用いられた。

【考察】二首はともに郭公の一声を詠んでいるが、左の歌は、郭公は「またなき」優れた声をもつものだが、「ただ一たび」だけ名乗ってゆくと詠む。「またなき」、二つとない声であることと、ただ一度だけ名乗ることとを対応させる趣向で、歌の心としては一声しか聞けなかったのを残念に思う気持ちであろう。

右の歌は、郭公の瞬時に飛び去って「雲路に消ゆる一声」では、その飛び去る行方さえ見定めることができない、と詠む。

俊成の判詞は、左歌については、歌の姿・詞を「めづらしく」聞こえたと評価した上で、その声を「さこそまたなき」と言った点をとりに上げ、『法華経』の「無二亦無三」によったのなら、その一声の場合「げにさもあること」と肯定している。右歌については、下句は「よろしく」見えるが、郭公の「雲路に消ゆる」一声と詠んだ点を問題視している。そして同じく一声を詠んでいても、右歌のような「聞きまよはし」たのよりも、左歌の「たしかに名乗る」声を聞いた方が勝ると判定する。この判定基準は七番の場合と同様で、従来の題の本意の重んじ方に従ったものである。

十番 左持持天庇 資隆

四七香をとめてやまほととぎすきなはずはなたちはなの名をやをらまし

右 顕昭

四八ほととぎすまちなかねやまの一こゑはきくにつけてもうらめしきかな

左歌、かをとめてといへるより、はなたちはなの名をやをらまなど、いとをかしきこゆ。もし、はなたちはなの心やすすみたらん。右歌、まちなかね山のひとこゑ、きくにつけてもうらめしなどいへる、女のうたとおほえて優にはきこゆるを、またききなれたる心ちもすれば、なほ、はなたちはなをまさると可レ申。

【通釈】 十番 左持持天庇 資隆

四七その香りを求めて、山ほととぎすが来て鳴かないなら、花たちはなの、名を折る——名折れともなろうか。

右 顕昭

四八ほととぎすの、待兼山の一声は、聞くにつけても、待ちあぐんでいるのに来ない人が恨めしく思われる。

左の歌は、「香をとめて」と言った初句から、「花たちはなの名をや折らまし」などと詠んだところまで、大層面白く思われる。(ただ、)あるいは花たちはなへの意識が先立っているであろうか。右の歌は、「待兼山の一声」が「聞くにつけても恨めし」などと詠んでいる点で、女の歌と思われて優美には聞こえるが、また聞き慣れたような気もするので、やはり、(左の)花たちはなの歌を勝ると判定しよう。

【注】○香をとめて 香りを求めて。○やまほととぎす ホトトギスが、本来山にいて、山から里に来て鳴く鳥と考えられたところから言

う。○はなたちばな 花の咲いているタチバナ。タチバナの花。タチバナ(橘)は、ミカンの原種と言われるが、和歌に詠まれるのは、もっぱら初夏に咲く花で、平安時代には特にその芳香が好まれた。また『万葉集』以来ホトトギスと取り合わせて歌われることも多い。○名をやをらし 名折れになるだろうか。「名を折る」は、名声を傷つける意であるが、「折る」は「花たちばな」の縁で用いられたものであろう。○まぢかね山 待兼山。撰津の国の歌枕。今の大阪府豊中市の丘。「待ち兼ね」る意を懸け、呼子鳥、ほととぎすに関連して歌に詠まれた。

【考察】左の歌は、郭公が花橘の「香をとめて」来て鳴かないなら、花橘の「名をや折らまし」と詠む。郭公が花橘の「香をとめて」鳴くと歌った先例には、

ほととぎす花橘の香をとめてなくはむかしの人やこひしき(『和漢朗詠集』一七四、のち『新古今集』二四四よみ人しらず)

がある。左歌はこれによって詠まれたところがあるが、郭公が花橘の「香をとめて」来て鳴くことのない場合を仮定して、それでは花橘の「名をや折らまし」と詠んでいる。花橘の名折れになるうか、との意を表す一方で、花橘だけに「折る」と表現した点に工夫があるのであろう。「香をとめて……折る」と言った歌は、「香をとめてたれ折らざらん」(『拾遺集』一六、躬恒)と梅の花について詠んだ例があるが、ここでは梅の花と同様香りの高い花橘について「折る」を生かしたと思われる。

右の歌は、郭公の「待ちかね山の一声」は聞くにつけても「恨めしきかな」と詠む。郭公の「待ちかね山の一声」を歌った先例は、

夜をかさね待ちかね山の郭公くものよそにて一声ぞきく(『高陽院七番歌合』一九、周防内侍、のち『新古今集』二〇五)

が有名である。右歌もこれによって詠まれたところがあるが、その声を聞くにつけても「恨めしきかな」と詠んでいる。この「恨めし」と思う心は、来ぬ人を待つ女の嘆きを郭公なり呼子鳥なりの鳴く声に

投影して共感した次のような歌に基づくものであろう。

来ぬ人をまつちの山の郭公おなじ心に音こそなかるれ(『拾遺集』八二〇、よみ人しらず)

来ぬ人をまぢかね山のよぶこ鳥おなじ心にあはれとぞ聞く(『堀河百首』二二二、『詞花集』四七、肥後)

これらの歌によって見れば、右歌は、郭公の待ちかね山の声に、来ぬ人を待つ身の嘆きをそそられ、来ぬ人を恨めしく思う心を詠んだものと思われる。

俊成の判詞は、左歌については、初句と下句を引いて「いとをかし」と評価する。ただ題の郭公よりも花橘の方に重点を置いて詠んだと見えるのを問題点として言い添えている。右歌については、郭公の待兼山の一声は聞くにつけても恨めしいと詠んだのを、「女の歌とおぼえて優」に聞こえると評価する。しかし「聞きなれたる心ち」もすると批判して、左が勝ると判定している。この判によると、『新編国歌大観』本の勝負付に「持」とあるのは不審で、『平安朝歌合大成』の「左勝」が正しいと考えられる。

十一番 左持

頼保

四九たれにこはしのびの岡のほととぎすなほうちとけて夜半に鳴くらん

右

寂念

五〇いそのかみふりぬる身にも時鳥あかぬころはかはらざりけり

左、たれにこはとおきて、よはに鳴くらんなどいへる、ことばづかひをかしく見ゆ。右は、素性がふるきみやこのほととぎすといへるを、述懐の歌にやとぞ見えたれど、作者にあひかなはば、さてもありなん。持と申すべし。

【通釈】

十一番 左持

頼保

四九(声を潜めていた)しのびの岡のほととぎすは、だれに對して一

体、心を許してこの夜半に鳴いているのであろう。

右

寂念

五〇年老いたこの身にも、時鳥の声を聞き飽きない心は、昔と変わらず残っていたことだ。

左の歌は、「たれにこは」と言つて、「夜半に鳴くらん」などと詠んでいる、その言葉遣いが面白く思われる。右の歌は、素性の「(いそのかみ)古き都のほととぎす(声ばかりこそ昔なりけれ)」と詠んだのに対して、これは述懐の歌であろうか(すると歌合の歌としてどうかという見方もある)と思われるけれど、作者にふさわしい歌であれば、それでも差し支えないと思う。持と判定しよう。

【注】〇たれにこは だれに対してこれは。「こは」は、代名詞「こ」に助詞「は」の付いた形で、感動の気持ちを示す言い方。〇しのびの岡 『和歌初学抄』『八雲御抄』に武蔵の歌枕とする。『和歌初学抄』に「コヒニ」と注があるのは、恋の歌に詠む地名であることを示し、すると「忍恋」(しのぶこひ、しのぶるこひ)の場合に用いられることになる。この歌の場合もその心を含むと見られるが、ホトトギスに關して言った場合であるから、その「しのび音」(本格的に鳴く前の、声を潜めた鳴き声)で鳴いたことも併せて表すのであろう。〇いそのかみふりぬる身 「いそのかみ」は枕詞で、ここでは「古」の連用形の「古り」に掛かる。「古りぬる身」は年老いた身。〇素性 俗名は良岑玄利。遍昭の在俗時代の子で、出家して雲林院に住む。『古今集』にはその歌三十六首を収める。生没年未詳。〇ふるきみやこのほととぎす 「いそのかみ古き都の郭公声ばかりこそ昔なりけれ」(『古今集』夏一四四、素性) 〇述懐の歌 「述懐」は本来、自分の思いを述べる意味で、平安時代初期の勅撰漢詩集『文華秀麗集』の部類の「述懐」も、そういう内容の詩を広く収めている。しかし述懐の歌は、特に自分の不遇や老いを嘆く思いを詠む歌が中心に考えられて、そのために晴れの歌合などには避けるべきものとする見方が生まれた。元永

二年(一一一九)の『内大臣家歌合』暮月二番の追判の判詞には、「左歌、述懐の心なり。歌合にはよまずとぞうけたまはる」という言葉が見える。けれども平安時代末期ごろには述懐の歌が多く詠まれたこともあり、大治三年(一一二八)の『西宮歌合』などの歌題には「月^寄述懐」という、副題に「述懐」を加えたものが見え、嘉応二年(一一七〇)の『住吉社歌合』あたりから後の歌合では「述懐」を題とすることが普通に行われた。晴れの百首歌では、より早く『堀河百首』に「述懐」の題が見える。

【考察】左の歌は、「しのびの岡」に結びつけて郭公をとらえ、声を潜めていた郭公が、この夜半に鳴くのは、一体だれに心を許してのことなのであろうと詠む。「注」で触れたが「しのびの岡」を恋の歌に用いる詠み方に従つて、郭公の行動を恋をする者のように扱っており、そういう趣向に特色をもつ作であらう。

右の歌は、「いそのかみ古りぬる」わが身にも、郭公の声に聞き飽きない心は昔と変わらず残っていたと詠む。郭公の歌としてこのような言葉で歌い出したのは、素性の一首、

いそのかみ古き都の郭公声ばかりこそ昔なりけれ(『古今集』夏一四四)

の歌を思わせるところがある。しかし素性の歌が古い都の郭公に焦点を置いて、その声だけは昔と変わらない、と詠んだのに対して、寂念の右歌は年老いたわが身の心を注視して、「時鳥あかぬ心は変らざりけり」と詠んでいる。その点ではむしろ次の周防内侍の歌に近いと思われる。

昔にもあらぬわが身にほととぎす待つ心こそ変らざりけれ(『詞花集』五五)

昔とは変わってしまったわが身ながら、時鳥に引かれる心だけは変わっていないことに気づいた際の感慨を率直に詠んだ歌である。

俊成の判詞は、左歌については、「ことばづかひ」に注目し「をかくしく見ゆ」と評価する。

右歌については、素性の「古き都の郭公」の歌を引用し、それと對比する形で右歌が「述懐の歌」である点に関して意見を述べている。

「注」に触れたように、述懐の歌は作者自身の不遇や老いを嘆く性質をもつために、晴れの歌合などでは避けるべきものとする見方があり、歌合の判詞の中にも、

左歌、述懐の心なり。歌合にはよまずとぞうけたまはる。(元永二年『内大臣家歌合』暮月二番追判判詞)

と記されている。こういう見方に対して、俊成は「作者にあひかなはば、さてもありなん」と述べたもので、作者にふさわしい歌なら述懐の歌も歌合に出して差し支えないという見解を示している。この場合右歌の作者の寂念は、この歌合に近いころ(一一五八年から一一六六年の間)に多分五十歳前後で出家しているので、「ふりぬる身」の感慨を詠んだ歌は作者らしい歌として俊成は肯定したのであろう。その結果、判定は持とされる。

十二番 左持

五二郭公しのだのもりのしのびねはきぢゆく我ぞまづはききける

右

生西

五二とどまらん所をしへよほととぎすたづねゆきつまたもきくべく
左の歌、しのだのもりのしのびねはなど、うためきてきこゆるに、木路ゆくわれぞとなのれるほどや、なだらかにしもきこえざらん。右の歌は、たづねゆきつとも又もきくべくもなど、あまりたしかなるやうにぞきこゆれど、はじめより、ただことばにいひくだして、ことわりつよく見ゆ。左はきぢこはけれど、万葉集などにもいへることなれば、しのだのもりもうちすぎがたくて、これも又持と申す。

【通釈】

十二番 左持

五二ほととぎすの、信太の森の忍び音は、紀路を行くわたしこそ、最

初に聞いたのだ。

右

生西

五二飛び去る先の休む所を覚えておくれ、ほととぎすよ、尋ねて行って、もう一度その声が聞けるように。

左の歌は、「信太の森の忍び音は」などと詠んだところは、歌らしく思われるが、「紀路行く我ぞ」と名乗ったあたりは、なだらかな詠み方とは思われぬであろう。右の歌は「尋ね行きつつ」と言い、「またも聞くべく」と言ったところなどは、余りに確か過ぎる言い方のように思われるけれど、歌の冒頭から飾らない言葉で詠み下して、事の筋道が十分に通った作と見える。(ただし)左の歌は「紀路」のあたりが硬い感じがするが、『万葉集』の歌などにも詠んでいる言葉であるから、この信太の森の歌も無視しきれないものがあって、この左右の歌も持と判定する。

【注】○しのだのもり 信太の森。和泉の国の歌枕。今の大阪府の西南部、和泉市の信太森神社のあたりにあった森、その郭公を詠んだ歌には、能因の「夜だに明けばたづねて聞かむほととぎす信太の森のかたに鳴くなり」(『後拾遺集』一八九)などの用例がある。○しのびね 忍び音。ホトトギスの本格的に鳴く前の、陰曆四月ごろの声を潜めた鳴き声。○きち 紀路。紀伊の国へ行く道。『万葉集』(三五等)に用例がある。○木路 紀路に同じ。『万葉集』三五では「木路」と表記される。○ただことば 飾らない普通の言葉。○しのだのもりもうちすぎがたくて 信太の森を無視して通り過ぎにくいことに託して、信太の森の郭公を詠んだ左歌が無視しきれない取り柄をもつことを言った。

【考察】左の歌は、郭公の「しのだの森」の忍び音を、紀路を行く自分こそ最初に聞いたと歌う。「しのだの森のしのび音は」と続けた部分は、頭韻などの点で音調が快い。

右の歌は、郭公に呼びかける形で、お前の休む所を覚えてくれ、尋ねて行って今一度声が聞きたい、と詠む。事の筋道を立てて率直に詠

み下した作である。

俊成の判詞は、左歌については、「しのだの森のしのび音は」のあたりを「歌めきてきこゆ」と評価するが、「木路ゆく我ぞ」のあたりを「なだらかにしも聞えざらん」と批判する。音調の観点から批評したものであろう。

右歌については、下句に對して「あまり確かなるやう」であると指摘しながらも、「ただ言葉」、飾らない言葉で詠み、「ことわり強く見ゆ」、筋道がよく通っている点を、それなりに評価しているようである。その上で左歌の「木路」の語にもどつて、硬い語感があるが『万葉集』にも用例があるととして、結局二首を持と判定している。

十三番

左持

成伸宿禰

五三つねよりもめづらしきかな郭公いまきのやまのけふのはつ声

右

政平

五四卯のはなのかきねにきなくほととぎすさながらやどにいかでうつさん

左、いまきの山のはつこゑは、まことにめづらしくはきこゆるを、このやまこそつねにききなれてもおほえはべらね。万葉集に、いまきのをかとはよめる心地すれば、山もありもやすらん。証歌やいるべからん。右、卯花のかきねになくらむ時鳥は、げにうつさまほしくもやとおもうたまへるを、これもいかにぞや。かの、しかのねながらといへるには、さすがにあらぬこちやすらむ。ただし、歌さま持と可申。

【通釈】

十三番

左持

成伸宿禰

五三常に聞く声よりも、新鮮に思われることだ、——ほととぎすの、今きの山で鳴く今日の初声は。

右

政平

五四卯の花の咲く垣根に来て鳴くほととぎすは、そのまま我が家に、

どうかして移したいと思う。

左の歌については、今きの山で鳴く初声は、まことに新鮮な感じには受けとられるが、この今きの山という名は平素聞き慣れたものと思われません。ただ『万葉集』の歌に、「今城のをか」と詠んでいたように思うので、「今城の山」もあるのかもしれない。しかしこれは（確認するのに）証歌が必要であろうかと思う。右の歌については、卯の花の咲く垣根に鳴く時鳥は、なるほど家に移したい気になるだろうかとは思いますが、この歌もいかがであろうかという感がある。あの「秋の野の萩の錦をわがやどに」鹿の音ながら（移してしがな）と詠んだ歌に比べると、さすがに違った感じがするであろうか。ただし、歌の姿は持と言うべきである。

【注】○いまきのやま 「いまき」は、山の名にホトトギスが「今來」て鳴く心を含めた表現であろう。ただし歌枕としては「いまきのをか」とは詠まれるが、「いまきのやま」の用例は他に見いだしにくい。「いまきのをか」は、俊成が判詞に指摘するように『万葉集』に「藤波の散らまく惜しみほととぎす今城の岳を鳴きて越ゆなり」（一九四八）と詠まれ、平安時代にも「郭公いまきのをかのひとこゑはさつきなりともめづらしきかな」（『新中将家歌合』一番右、顕仲）などと詠まれてゐる。『万葉集』の「いまきのをか」は、現在の奈良県吉野郡大淀町おおよの地名に残る「今木」のあたりの丘陵部かと言われる。平安後期ごろには所在が明らかでなくなっていたようで、『五代集歌枕』では「其国不三分明」とする。『八雲御抄』では紀伊の国の名所とする。○卯のはな うのはな。ユキノシタ科の落葉低木ウツギの花。初夏に白い五弁の花が円錐状に集まって咲く。「うの花の散らまく惜しみほととぎす野に出で山に入り来鳴きとよもす」（『万葉集』一九六一）などのようにホトトギスと共に詠まれることが多い。○しかのねながらといへる 清原元輔の「秋の野の萩の錦をわがやどに鹿の音ながら移してしがな」（公任撰『前十五番歌合』一六、『三十六人撰』一一〇）に見え

る形。『元輔集』二一〇、『和漢朗詠集』二八五では第三句「ふるさとに」の歌を指す。

【考察】左の歌は、郭公の「いまきの山」の初声は常に聞く声よりも新鮮に感じられると詠む。これは山の名の「いまき」に郭公が「今来」で鳴くことを掛けた表現に趣向上の重点がある作と見られる。しかしこの種の表現には先例がある。源頭仲の歌、

郭公いまきのをかのひと声はさつきなりともめづらしきかな（『新中将家歌合』一番右）

などがそれである。二首は似た歌柄で、ただ頭仲の歌が五月の郭公の声を詠んでいるのに対して、右歌は「初声」を詠んだ点で新鮮さがより強調されていると言えないこともないが、やはり同工異曲の作と言うべきであろう。

右の歌は、卯の花の咲く垣根に来て鳴く時鳥をそのまま我が家に移したいと詠む。卯の花と時鳥は『万葉集』以来配合して歌われることが多いが、同様の関係は萩と秋の鹿にも見られるところで、それをそのまま我が家に移したいと詠んだ発想の歌が、俊成の判詞に挙げる清原元輔の歌である。

秋の野の萩の錦をわがやどに鹿の音ながら移してしがな（『前十五番歌合』一六、『三十六人撰』一一〇、『元輔集』二一〇等では第三句「ふるさとに」）

この元輔の歌と比べると、右歌は配合された素材は異なるが、発想はよく似ている。

俊成の判詞は、左右の歌の思いにそれぞれ一応同感の意を示しながらも、左歌については、「今城のをか」は古来詠まれるが「今きの山」と詠んだ歌があるだろうかと問題点を示し、右歌については、同様の発想の先行歌として元輔の歌を挙げて批判した上で、持と判定している。

十四番 左持

心覚

五五ほととぎすしばしわれともかたらはでたれしのびねをなきてすぐらん

右

俊恵

五六いまこそはいでちがふなれほととぎすしばしすそ野にまつべかりけり

左歌、われともといへるほど、いと庶幾せられねど、うたざまなだらかにみゆ。右はすがたことばをかしくは見ゆるを、やまなくてすそ野ばかりやいか。また、いでちがふなれといへるほど、みやこのいちなどにとやと、人しげき心地やすらむ。左はさせることなし、右はすがた、さまをかし。仍為_レ持。

【通釈】

十四番

左持

心覚

五五ほととぎすは、少しの間もわたしに親しむことをせずに、一体だれを思つて、忍び音で鳴いて飛び去っていくのだろうか。

右

俊恵

五六ほととぎすは、今ちようど（わたしと）入れ違いに（山を）出たようだが、しばらくすそ野で待てばよかつたと思う。

左の歌は、「我とも」と言っているあたりが、全く望ましくない詠み方と感ぜられるけれど、歌の姿は滞りなく詠まれていると思われる。右の歌は、姿、言葉が面白いとは思われるが、山を詠まずにすそ野だけを詠んだのは、いかがであらうか。また、「出で違ふなれ」と言ったあたりも、都の市などの場合のようで、人の多い感じがするだろうかと思う。しかし、（番えられた）左の歌はさほどの作ではない。そして右の歌はその姿、歌いようが面白い。それで持と判定する。

【注】〇たれしのびねをなきて だれを思つて、忍び音で鳴いて。思ひ慕う意の「しのび」に、「忍び音」（四月ごろのホトトギスの、声をひそめた鳴き声）を掛けた表現。〇いでちがふ 出で違ふ。入れ違いに出る。〇庶幾せられねど 望ましくないと思われるが。「庶幾」は

〔庶〕も「幾」も「こいねがう」意で〕望み願うこと。

【考察】左の歌は、郭公が「たれしのびねを鳴きて過ぐらん」と詠む。だれを「偲^{しの}び」と「忍び音」を掛けたところに工夫のある作であろう。

右の歌は、郭公をたずねて山に入ったが、入れ違いに郭公は山を出たようで、しばらく裾野^{すそ}で待てばよかった、との心を詠んでいる。「今こそは」と強い語調で歌い出して、「出で違ふなれほとぎす」と軽く受ける、そんな軽妙な面白みを特長とする作であろう。

俊成の判詞は、左歌については、「我ともかたらはで」の「我とも」と詠んだあたりを特に望ましくない表現と批判するが、「歌さま」は「なだらかに見ゆ」と評している。

右歌については「姿詞をかし」と評価する一方、二つの点を批判している。その一つは「すそ野」とだけ言って山を詠んでいない点、今一つは「出で違ふなれ」という表現が人の多い所を思わせる点である。これらの点は欠点としても大きな欠点ではないとも見えるが、俊恵が家集『林葉和歌集』に右歌を収めず、次の歌を収めているのは、俊成の批判を受け入れて右歌を改作したものであろう。

いまこそは入れちがふなれ時鳥尋ねかねつつ帰る山ぢに（二二七、

〔尋子規帰聞〕

俊成は右歌について右のように批判するが、勝負の判定は左右を見比べ、左歌は「させることなし」として、右歌は「姿、さまをかし」と長所を評価し、結局持と判定している。